令和３年度　年報

大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方

目　次

１　ごあいさつ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２　「創設時の高揚感をいま一度」　寄稿　上田　文世　・・・・・・・・・2

（運営懇話会殿堂入り部会委員、演芸ライター）

３　上方演芸資料館運営状況（令和３年度）　・・・・・・・・・・・・・・5

４　収蔵資料の紹介

「発見！桂家残月資料」　荻田　清　・・・・・・・・・・・・・・・15

（運営懇話会資料整理・活用部会長、梅花女子大学名誉教授）

「桂家残月とレコード吹込」　大西　秀紀　・・・・・・・・・・・・・21

（運営懇話会資料整理・活用部会委員、

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員）

５　展示資料の紹介、収蔵資料の紹介（資料整理の現場から）　・・・・・・・・25

６　上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等　・・・・・・・・・・・・・・41

【表紙の写真】

桂家残月の直筆台本、御座敷名簿・各席講題控

講談の革新をめざした桂家残月の資料群。大正後半の新講談の創作活動が詳しくわかる多数の台本（点取り、演者控え）のほか、出勤帳ともいえる『御座敷名簿・各席講題控』も残っていた。詳細は本文参照。

ごあいさつ

大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）では、上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる方を、「上方演芸の殿堂入り」名人として表彰しており、これまでに、61組97名の方々が殿堂入りをされています。

現在、全ての殿堂入り名人のイラストを一同に展示し、当館所蔵の資料などとともに、その足跡をたどる企画展示「イラストで振り返る上方演芸殿堂入り名人展」を開催しています。多くの皆様にご覧いただければ幸いです。

企画展示の開催にあたり、平成８年度の第１回殿堂入りよりこれまでの間、全ての殿堂入り名人の姿を描き続けてくださった成瀬國晴氏に、この場を借りてお礼申し上げますとともに、長きにわたり、資料館の運営にご支援、ご協力をいただきましたすべての方々に心から感謝申し上げます。

さて、当館の運営につきましては、今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、イベントの参加人数を縮小するなど、活動制限を余儀なくされることもありましたが、感染防止対策を徹底し、企画展示や毎月開催している体験型講習会などを通じて、世代を超えて多くの方々にご来館いただき、上方演芸の歴史に触れ、楽しんでいただけるよう様々な取り組みを進めています。

特に、今年度は、上方演芸にあまり馴染みのない若い世代にも、その魅力を伝えていけるよう、夏休み期間を利用した子ども向け体験型講習会やクイズラリーを実施し、多くの子どもたちに上方演芸について学んでいただくことができました。

また、認知度向上に向け、今年度より新たにYouTubeによる情報発信を開始するとともに、TwitterなどのSNSによる日々の情報発信についても、トレンドを意識した内容を取り入れるなど、創意工夫をしながら取り組んでいます。

今後とも、資料館が世代を超えた多くの方々に親しまれ、全国で唯一の「笑い」をテーマにした体験型資料館として、広く上方演芸の魅力を発信できるよう努めてまいりますので、関係者の皆様方には一層のお力添えをお願い申し上げます。

結びに、本年報を通じて、皆様方が当館の取り組みについて、ご理解を深めていただくことができれば、幸いに存じます。

令和４年１１月　　館長　佐藤　謙一

創設時の高揚感をいま一度

上田　文世
（殿堂入り部会委員）
（演芸ライター）

大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）が大阪・千日前にオープンしたのは、1996（平成８）年 11 月 15 日だった。前日の式典でオープニングの口上があり、創設に関わった、落語家の桂米朝さん、漫才の夢路いとし・喜味こいしさん、浪曲の春野百合子さん、そして講談師の三代目旭堂南陵さんが登壇した。司会は吉本興業の西川きよしさん。

南陵さんの口上が特に面白かった。ワッハ上方への期待感と、開設したことへの高揚感に溢れていたからだ。やや長いが要約しながら引用させていただく。

「大阪のイメージは、私の子どもの時分は煙突の数と、もうもうとした煙でした。これぞ『大大阪』の姿と自慢しておりました」

「ところが、その後、煙で病人がでけましてから、これはいかんというので、次にできあがりましたイメージは『商都・大阪』です。といっても金もうけだけが人間の生きるべき道ではございません。『金なんぞいらねえや』という芸能人もいて、うわべだけですけれども、本当は欲しいんですがね。これはいかんということになりまして、そこで出ましたのが食べ物、おいしいたこ焼きでございます」

「しかし、大阪の代表がたこ焼きでは軽いような気がします。そこへ出ましたのが、このワッハ上方でございます。私の先祖の講釈師が東京へ参りましたときに、東京の講釈師が『おい、上方』と言われまして、それで『何じゃい、下方』と、こう返事したそうです」

「その上方に『ワッハ上方』ができまして、それから『芸能人の大阪』というイメージができあがりまして、誠に我々も鼻が高うございます」

「まあ、こういう所を大阪では、けつまずくほど、こしらえてもらいたい、と思うております」

このとき南陵さん 79 歳、上方講談協会の会長をしていた。

図１　ワッハ上方オープニングの口上（筆者撮影）
左端から、三代目旭堂南陵さん、二代目春野百合子さん、三代目桂米朝さん、喜味こいしさん、夢路いとしさん

演芸担当の新聞記者をしていた筆者は、この口上を聞いて「そうだ、そうだ」と実感した。実際、芸能人の方々も、この施設を担当される役所の方々も、ここを使ってイベントを開く方々も、そして、ここを取材する私たちも、笑いの都・大阪のシンボル・イメージとして、ものすごい高揚感、期待感をワッハ上方に抱いた。

それは、ワッハ上方を使ってイベントを開く芸能人に強く表れている。

４代目・伊東雄三館長のときに出した『ワッハホール 15 年の歩み』(2010（平成 22）年刊行）には、５階にあったワッハ上方演芸ホールの使用状況が出ている。それによると、漫才、講談、落語、演劇など、あらゆるジャンルの芸能人が、このホールを競うように利用している。利用率４分の１と、最も利用が多いのが落語で、次いで同程度の漫才・コント、そして演劇と続き、邦舞、邦楽もよく利用されていた。

視聴率などを巡って、日頃は、熾烈な競争を繰り広げているＮＨＫをはじめ、在阪のテレビ放送各局も開館前から、これまた競うように積極的に協力体制を築いていった。その一つが「昔の笑い・今の笑い」と題したお笑い番組作りだ。大阪・ミナミの料亭に伝わる座敷芸の「へらへら踊り」も披露・収録された。三味や太鼓に合わせて四人の女性が舞い踊り、途中で逆立ちもあるというユーモラスなものだ。寄席の踊りなども収録され、出演する側も「永久保存」されるというので大張り切り。お客さんで会場は立ち見も出るほどだった。

愛好家から寄せられた五千点余のＳＰレコードから漫才、落語、浪曲の名人芸を選び、その場で再生して聞く会もあった。朝 10 時半から夜９時まで、ＴＶ各局が秘蔵のテープを出し合い、お客さんと一緒に楽しむ会もあった。今では全く見ることも聞くこともできない「三曲萬歳」や「数え唄」が流れ、50 ほどの座席が長時間にも関わらず、いつも誰かが座っていた。

以下はオープン後のことだが、５階の演芸ホールでは、様々なジャンルの催しがあった。現役だった筆者は、三脚にカメラを据えて、主に最後尾から見せてもらった。滅多に見られない小松まことさんの「うしろ面」も、ここで写真に記録しながら見ることが出来た（2002（平成 14）年２月）。

東京の伝統芸能も見ることが出来た。漫才コンビの特別公演で、江戸糸あやつり人形がゲスト出演したのだ。1998（平成 10）年 10 月のことで、これもカメラに収めながら眺めた。取材という名目で筆者も楽しんでいた。いろんな芸能との接点がここにあり、その存在を教えてくれたところであった。

2003（平成 15）年８月 22 日から３日間、ワッハホールのほか、４階の上方亭など、ほとんどすべての施設を使って開かれた「上方芸能まつり ｉｎ ミナミ」では、筆者もスタッフの一人として参加した。大阪のお笑いはもとより、講談、浪曲、さらには能・狂言、雅楽、上方唄、地唄があり、府下に残る伝統芸能の公演も見ることが出来た。

例えば、河内長野市の「西代神楽」で獅子舞のユーモラスな動きが面白かった（図２）。そのほか、高槻市の保存会による淀川三十石船 船唄（図３）などで、このようなイベントでなければ見られない、珍しい芸能であった。

まだまだ暑さが盛りの頃で、女性スタッフが浴衣姿でビラを配るなどした。熱意が実って、記録に残るほどの入場者があったと伺っている。

盛り上がったのは、運営の関係者だけではない。一般の人たちも、高揚感を持って、開場の日を待ち望んでいた。近畿一円、いや全国あちこちから、古いレコード（ＳＰ）やチラシ、雑誌、台本、舞台衣装、小道具などの提供申し出があった。発足時には二万点余の資料が集まったと聞いている。

運営を担う大阪府のスタッフも燃えていた。「なにわ文化を、みっちり味おうておくんなはれ」を合い言葉に、資料収集や展示室、演芸ホールの運営などに走り回っていた。動き出し始めた新しいなにわの名所への期待感に応えようと奔走していた。

ところが 2008（平成 20）年２月、府の財政難から「財政非常事態宣言」が出され、資料館も見直しの対象となった。多くの方からの署名を集め存続を願うも、その後は縮小されていくばかり。「こんなところを、けつまずくほど、こしらえてもらいたい」と、オープニングの口上で話していた三代目旭堂南陵さんの夢は叶わず、演芸ホールも無くなってしまった。

現スタッフの努力は今も続き、様々なイベントを考え出し、集客力アップに努めているとはいえ、現状をみると寂しさはつのる。創設時、見る側も演じる側も、そして運営する側も抱いたあの高揚感、熱き想いを今一度、取り戻せないのか。そのためには我々や府民は何をなすべきか。どんなことで協力すべきか、改めて考え続けていきたい。

図２　西代神楽(筆者撮影)
上方芸能まつり in ミナミにて（2003.8.22～8.24）

図３　淀川三十石船 船唄(筆者撮影)
上方芸能まつり in ミナミにて（2003.8.22～8.24）

上方演芸資料館運営状況（令和３年度）

■ 上方演芸資料館（ワッハ上方）入館者数・視聴ブースリクエスト件数〔月別推移〕

	入館者数	開館日数	１日あたりの平均人数	視聴ブースリクエスト件数（月計）
4 月	※1 803 人	※1 21 日	38 人	153 件
5 月	※1 0 人	※1 0 日	0 人	0 件
6 月	449 人	8 日	56 人	80 件
7 月	1,199 人	27 日	44 人	215 件
8 月	1,316 人	26 日	51 人	212 件
9 月	1,169 人	26 日	45 人	210 件
10 月	1,426 人	27 日	53 人	271 件
11 月	1,462 人	24 日	61 人	223 件
12 月	1,355 人	24 日	56 人	185 件
1 月	1,357 人	24 日	57 人	191 件
2 月	1,012 人	24 日	42 人	178 件
3 月	1,664 人	27 日	62 人	264 件
合 計	13,212 人	258 日	51 人	2,182 件

※１　令和 3 年 4 月 25 日から 6 月 20 日まで臨時休館（新型コロナウイルス感染症拡大防止）
　　令和 3 年 11 月 30 日臨時休館（館内点検）
　　〔休館日〕毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は、翌平日が休館日）及び年末年始

〔過去３か年（平成 30 年度～令和２年度）〕

	入館者数	開館日数	１日あたりの平均人数	視聴ブースリクエスト件数（月計）
H30	※2 7,567 人	※2 171 日	44 人	4,623 件
R1	※3 34,541 人	※3 264 日	131 人	4,857 件
R2	※4 12,166 人	※4 266 日	46 人	2,509 件

※２　平成 30 年 4 月 1 日～11 月 30 日までの数値
　　（施設改修工事のため、平成 30 年 12 月 1 日～平成 31 年 4 月 23 日まで休館）
　　〔休館日〕毎週水、木曜日及び年末年始
※３　平成 31 年 4 月 24 日（リニューアルオープン）～令和 2 年 2 月 28 日までの数値
　　令和 2 年 2 月 29 日から 3 月 31 日臨時休館(新型コロナウイルス感染症拡大防止)
※４　令和 2 年 4 月 1 日から 5 月 18 日臨時休館(新型コロナウイルス感染症拡大防止)

■ 上方演芸資料館運営懇話会　開催実績

１回開催　（令和４年３月 23 日）

■ 上方演芸資料館運営懇話会　各部会　開催実績

・殿堂入り部会

２回開催　（令和４年２月１日、令和４年３月 15 日）

・資料整理・活用部会

12 回開催（月１回開催）

・企画部会

２回開催　（令和３年 12 月 27 日、令和４年２月 22 日）

・放送資料部会

１回開催　（令和４年３月 29 日　書面による開催）

■ 研修会実施報告

資料整理・活用部会（資料整理に係る有識者会議）委員が研修を実施。
テーマに沿って、資料館職員が受講。

＜実績＞

開催日	部会等	研　修　内　容	講師
5 月 11 日	第 2 回部会	上方演芸資料館とわたし	荻田部会長
6 月 8 日	第 3 回部会	上方演芸資料館とわたし	荻田部会長
7 月 13 日	第 4 回部会	曾我廼家劇などの番付の見方について	荻田部会長
9 月 14 日	第 6 回部会	砂川捨丸の SP レコード-府立上方演芸資料館所蔵盤について	大西委員
12 月 14 日	第 9 回部会	日吉川秋水の資料について	荻田部会長
1 月 18 日	第 10 回部会	山崎整『関西発レコード 120 年埋もれた音と歴史』より	大西委員
2 月 8 日	第 11 回部会	上方講談の歴史資料断片	荻田部会長
3 月 8 日	第 12 回部会	上方講談の歴史資料断片２	荻田部会長

■常設展示　開催実績

場　所	内　容	展示風景
常設展示エリア	【テーマ・ねらい等】 　大阪弁の解説パネルや、歴史的価値のあるポスター展示のほか、映像音声視聴ブースを設置。上方演芸の歴史を知ることができるコーナー。	

■特別展示　開催実績

場　所	内　容	展示風景
企画展示エリア	【テーマ・ねらい等】 上半期「上方演芸の殿堂入り」名人 特別展」（夢路いとし・喜味こいし） 期間 令和 3 年 4 月 3 日～8 月 31 日 　夢路いとし・喜味こいしは、2004（平成 16）年に「上方演芸の殿堂入り」名人として表彰。 　昭和から平成にかけて誰もが楽しめる身近な話題を取り入れたしゃべくり漫才で、漫才の最高峰に達したと評価され、兄弟コンビとして長く活躍。 　多くの方々に親しまれ、上方演芸の発展と振興に大きな役割を果たしたお二人の写真パネルなどの資料を展示。	

■企画展示　開催実績

場　所	内　容	展示風景
企画展示エリア	【テーマ・ねらい等】 「演芸人さんと言葉展」 期間 令和3年9月11日～令和4年3月31日 　演芸人が巧みにあやつる言葉は、笑いを誘うだけでなく、魅力的な登場人物を演じるなど演芸の世界をつくりあげている。 　演芸人自身が大事にしてきた言葉と、演芸人がファンにプレゼントした色紙に書き込む言葉の数々をパネルで紹介し、演芸の魅力を紹介。 　「周年を迎えられた方」、「襲名された方」、「賞を受賞された方」など、演芸人の節目を迎えた方々の「言葉」にまつわるエピソードを月替わりで紹介。	

■25 周年記念企画　開催実績

場　所	内　容	展示風景
体験エリア	【内容】 「25周年を記念した上方演芸の殿堂入り」名人の展示 期間 令和3年11月10日～令和4年3月31日 1996（平成８）年11月15日に開館した上方演芸資料館の25周年を記念して、上方演芸の殿堂入り名人の資料紹介コーナーを設置。 紹介コーナーでは、奇術で初めて殿堂入りしたゼンジー北京、結成80年の中田ダイマル・ラケット、没後20年の人生幸朗や2022（令和４）年に節目を迎える橘ノ円都、露の五郎兵衛、梅中軒鶯童、春野百合子、二代目旭堂南陵、三代目旭堂南陵の資料を展示。	

■ 館内イベント開催実績

〇体験型講習会（ワークショップ）及び専門家講演会　※主催事業

開催回数　16 回、参加者数　205 人

（開催期間：令和３年 10 月～令和４年３月）

〇在阪放送局とのコラボイベント

「ワッハ上方トークイベント　至芸！いとこい漫才を偲ぶ」

開催回数　１回、参加者数　15 人　（開催日：令和４年１月 23 日）

＜内容＞

回数	開催日	内容	講師	参加人数
1 2	10 月 16 日	講談の魅力、楽しみ方	旭堂南鈴	30 人
3 4	11 月 6 日	漫才の仕組み	ブランケット	30 人
5 6	11 月 20 日	浪曲の魅力、楽しみ方	京山幸乃	30 人
7 8	12 月 4 日	諸芸（マジック）のテクニック	にしね・ザ・タイガー	22 人
9 10	12 月 18 日	講談の魅力、楽しみ方	旭堂南扇・旭堂南喜	20 人
11	1 月 8 日	「なつかしの浪曲資料」 収蔵資料から	荻田清	24 人
12 13	1 月 22 日	浪曲の魅力、楽しみ方	三原麻衣	22 人
14	1 月 23 日	ワッハ上方トークイベント 「至芸！いとこい漫才を偲ぶ」	津田慎一、高見孔二、 藤田曜、高垣伸博	15 人
15 16	2 月 5 日	落語の魅力、楽しみ方	桂三実	12 人
17	3 月 5 日	「音で聴く。砂川捨丸の世界」 収蔵資料から	大西秀紀	15 人

※　ワークショップは 2 部制で実施　　合計 220 人
各回の定員は 15 名に限定（新型コロナウイルス感染症拡大防止）
ただし 1 月 8 日開催分は定員 30 名

〇アマチュア団体との事業連携　※共催事業含む

開催回数　15 回、参加者数　184 人

（開催期間：令和３年 10 月～令和４年３月）

※各回の定員は 15 名に限定（新型コロナウイルス感染症拡大防止）
ただし 12 月 25 日開催分は定員 30 名

上方演芸の殿堂入り

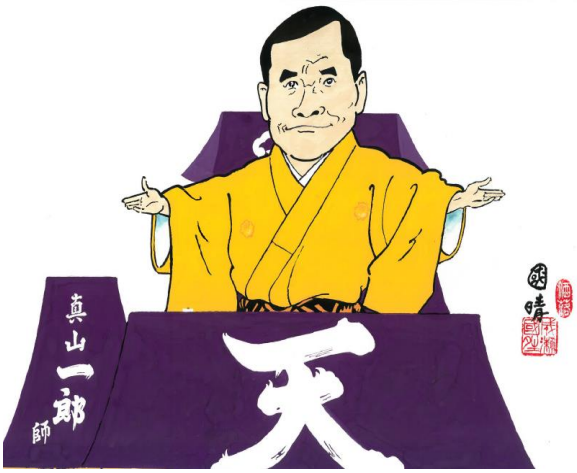
上方演芸は大阪の誇るべき文化としていつの時代も人々に愛され、受け継がれてきました。

それぞれの時代に光り輝き、大勢の観客を楽しませた演芸人さんがあまたおられます。

上方演芸資料館では、平成８（1996）年度から、「上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる方」を対象に選考し、「上方演芸の殿堂入り」名人を決定しています。令和２（2020）年度（第 24 回）までに落語・浪曲・講談・漫才・漫談・コメディアンなど 59 組 95 名の方々が受賞されました。

第25回目となる令和３（2021）年度は、笑福亭仁鶴さん、初代真山一郎さんが受賞され、表彰式は、令和４（2022）年７月14日に大阪府公館で開催しました。

笑福亭仁鶴



初代真山一郎

（画）イラストレーター成瀬國晴氏

「上方演芸の殿堂入り」名人一覧表

第１回（平成８年度）	初代桂春団治、五代目笑福亭松鶴、横山エンタツ・花菱アチャコ、 砂川捨丸・中村春代、二代目旭堂南陵、三代目吉田奈良丸
第２回（平成９年度）	ミスワカナ・玉松一郎、中田ダイマル・ラケット、花月亭九里丸
第３回（平成 10 年度）	六代目笑福亭松鶴、芦乃家雁玉・林田十郎、梅中軒鶯童
第４回（平成 11 年度）	二代目桂春団治、松葉家奴・二代目松葉家喜久奴、初代京山幸枝若
第５回（平成 12 年度）	四代目桂米団治、松鶴家光晴・浮世亭夢若、西条凡児
第６回（平成 13 年度）	二代目桂枝雀、浪花家市松・浪花家芳子、冨士月子
第７回（平成 14 年度）	橘ノ円都、桜川末子・二代目松鶴家千代八、吾妻ひな子
第８回（平成 15 年度）	都家文雄・静代、林家とみ
第９回（平成 16 年度）	夢路いとし・喜味こいし、横山やすし・西川きよし
第 10 回（平成 17 年度）	三代目林家染丸、五代目桂文枝、海原お浜・小浜、宮川左近ショー
第 11 回（平成 18 年度）	ミヤコ蝶々・南都雄二、人生幸朗・生恵幸子、三代目旭堂南陵
第 12 回（平成 19 年度）	ミスワカサ・島ひろし、島田洋之介・今喜多代、京唄子・鳳啓助
第 13 回（平成 20 年度）	横山ホットブラザーズ、暁伸・ミスハワイ
第 14 回（平成 22 年度）	三代目桂米朝
第 15 回（平成 23 年度）	二代目露の五郎兵衛、若井はんじ・けんじ
第 16 回（平成 24 年度）	上方柳次・柳太、岡八郎（コメディアンとして）
第 17 回（平成 25 年度）	川上のぼる、木川かえる
第 18 回（平成 26 年度）	二代目平和ラッパ、タイヘイトリオ
第 19 回（平成 27 年度）	秋田Ａスケ・Ｂスケ、花紀京（コメディアンとして）
第 20 回（平成 28 年度）	三代目桂春団治、二代目春野百合子
第 21 回（平成 29 年度）	かしまし娘
第 22 回（平成 30 年度）	レツゴー三匹、三遊亭小円・木村栄子

第 23 回（令和元年度）	笑福亭松之助、Ｗヤング
第 24 回（令和２年度）	ゼンジー北京
第 25 回（令和３年度）	笑福亭仁鶴、初代真山一郎

※　平成８年度～令和３度／61 組 97 名

発見！桂家残月資料

荻田　清
（資料整理・活用部会長）
（梅花女子大学名誉教授）

「発見」とは、今までなぜ気づかなかったのかという反省でもある。筆者が上方演芸資料館の資料整理に関わるようになった頃、『上方芸能』198 号（平成 27〔2015〕年 12 月刊）に「「上方演芸」の「資料館」としての上方演芸資料館」という文章を寄稿した。その中で、収蔵資料に偏りがあることを嘆いたが、「自筆原稿など超一級資料もある」と述べた。今回紹介する残月資料はまさにその超一級資料だと思われる。が、恥ずかしながらその時まだ気づいていなかった。受け入れの記録によれば、資料館が正式に開館するかなり以前、準備段階の平成２（1990）年 12 月 18 日に入ったとある。平成 30（2018）年収蔵庫を千日前から咲洲に移転する際に、一点ずつ資料館の封筒に納められ一箱にまとめているのを見た。それなのに今まで手をつけなかったのは、筆者自身、桂家残月への関心が薄かったためといわざるをえない。

桂家残月について、最初に『日本芸能人名事典』（平成７（1995）年、三省堂）で確認しておく。

明治七（1874）十一・二八－大正一五（1926）　明治・大正期の寄席色物芸人。本名は一説に小野菊水。はじめ講釈の二代錦城斎一山の門で菊水。明治三〇年代に大阪へ移り、三友派、大八会などに参加。残月楼菊水また桂家残月の名で「新講談」「改良人情噺」を演じた。明治末には一時活動写真の弁士に転じたが、大正の中ごろにはまた寄席に復帰。大正の末近くまで吉本の連名にみえる。

事典の性格上簡略ながら要を得た説明で、芸人残月の評価はこの文章に尽くされているかもしれない。しかし、「寄席色物芸人」に分類してしまうのは、この人などの演じた「新講談」への評価が低すぎるように思う。また、上の説明は活動弁士時代を経て寄席に復帰した大正の中ごろ以降の説明が乏しい。上方演芸資料館に所蔵されている資料は、まさにその時期の足跡を残したものということができるのである。

まずは、資料の全体像を示しておこう。

１、桂家残月台本集１　大正十年秋九月　新材料

・近世史略　榎本ノ軍用金　　・伊藤公ト女　大正十年十月十七日初上り
・鍾馗床（明治初年の物語）　　・宮様ト秀公（閑院宮）　　・婆の恩
・市川小団治　恨ニ報ゆるに徳　名優ノ心がけ　大正十一ノ八月廿七日此稿初ム
・西郷隆盛先生ト御いくさん　　・秩父宮殿下雍仁親王

２、桂家残月台本集２　大正六年六月　大正八年桜月改定　新材料

・竹田宮殿下（洋物店　御手袋）　　・同　菓物爺（竹田宮殿下と菓物売老爺）
・北白川宮殿下（弐銭銅貨）　　・同　牛太郎　上・下　　・鬼無里ノ尻内平四郎
・皇太子ト馬丁ノ重太郎（国母陛下）　・北白川宮殿下ト画伯（北白川殿下と尾竹画伯）

３、桂家残月台本集３　大正十年弐月　半七捕物帳　壱巻　原作者岡本綺堂先生
・御化師匠　大正六年五月　文芸倶楽部
・入谷田圃　大正十年二月十九日より起稿、大正七年二月之文芸倶楽部
・半鐘の音　大正十年二月起稿、大正六年六月文芸倶楽部
・柳橋の殺人(原名お照の父)　大正十年二月廿三日起稿、大正七年四月文芸倶楽部
・人の首(原名湯屋の二階)　大正十年三月起稿、大正六年四月文芸
・旅画師(原名旅画師)　大正十年参月三日起稿、大正九年一月の文芸倶楽部
４、桂家残月台本集４　大正拾壱年の新材料　残月述
・男爵大倉喜八郎　大正十一、八、三十ノ出来
・星と横田　(はさみこみ紙一枚あり)
・ふんどしの物語(児玉と後藤)　大正十三年一月五日作　終り
・皇太子(そばやノ御美談)　大正十三年正月九日　稿終り
・良子女王殿下　付山梨大将　大正十三年正月十日初め、大正十三年正月十七日稿終り、
大正十三年二月一日種初めは、中本・富貴・紅梅亭・北の新地
・二重橋　大正十三ノ正月十七日起稿
・皇太子軽井沢に御避暑　大正十三年四月九日出来
・御成婚の当夜　大正十三ノ七月十二日完成
・加藤高明　上　大正十三ノ九月十一日終り、下巻ハあんまの美談別本ニアリ
・財部大将　上下　大正十三年九月十七日　此稿終り
・三代目尾上菊五郎　大正十三ノ九月サンデー毎日、大正十四年正月廿二日稿終り
・澄宮殿下崇仁親王　大正十四年正月廿五日稿出来、二月四日、南陽・京三・富貴、種下シ
５、半七捕物帳　上下　石燈籠ノ巻　大正八年二月十六日起稿
６、〔鬼っ子の素性を追う〕　(表紙欠、題名不明仮題、筆写台本)
７、〔乃木と船頭〕　(表紙欠、題名不明仮題、筆写台本、わら半紙)
８、海坊主　半七捕物帳ノ内　大正十四年五月起稿、六月四日出来
９、はりこの寅　原作岡本綺堂先□　大正十年□月起稿(あとヤブレ)　大正九ノ四月号
10、甘酒売　岡本綺堂氏原作　大正十年七月起稿、十月出来　大正九ノ九月号
11、江戸探偵　朝顔屋敷　上下　大正八年八月十一日稿、三人会旅行紀念、於広島市
12、法衣屋事件　大正十一年九月十五日出来、九席
13、〔児玉と刑事〕(表紙欠、題名不明仮題、筆写台本)
14、〔乃木大将墓参〕(表紙欠、題名不明仮題、筆写メモ)
15、笠森団子　全　大正十一年七月廿八日出来　十三席分
16、〔恋の山県有朋〕　(表紙欠、題名不明仮題、筆写台本)
17、かまぼこやころし　二　大正八年一月廿八日
18、かまぼこやころし　三　大正八年一月廿九日記
19、文政奇聞　槍突ノ上　大正八年五月卅日稿、於神戸市打出旅館
20、皇室美談鴫鳴く山　大正八年五月十四日稿、故きよ子紀念、神戸市福山楼上稿
21、〔娘義太夫と溝口末吉〕　(表紙欠、題名不明仮題、筆写台本)
22、御座敷名簿・各席講題控

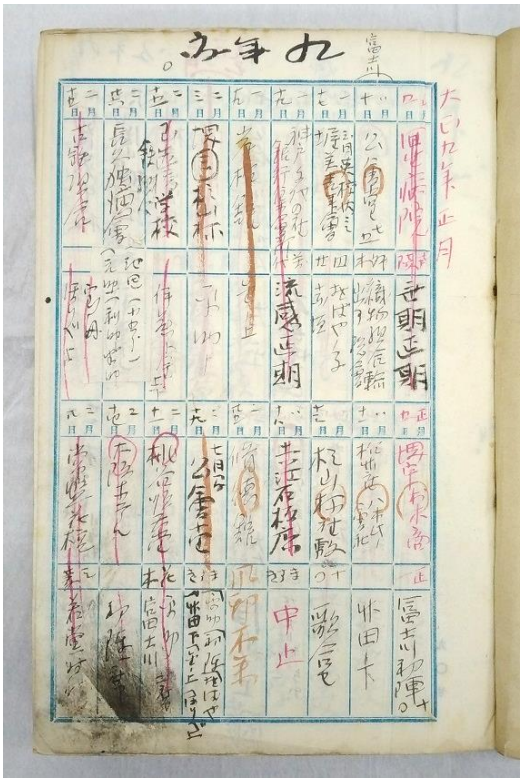
23、アルバム　一冊

１～21 までを台本集・台本としたが、厳密にいえば、芝居でいう台本というよりは、自身口演のための手控えであり、「点取り」というべきかもしれない。ていねいに台詞を記した部分が多いが、「……の弁」と省略した箇所も出てくる（注１）。しかし、全体としては、このまま読み上げても口演になるような詳しさである。半紙または罫紙に墨書（一部ペン書き）。達筆な文字で記されている。起稿、脱稿の日付を末尾に記したものもある。

内容は皇室物、明治偉人伝ともいうべき軍人や明治政府の要人の逸話、そこに文芸倶楽部から採った「半七捕物帳」が入り込み、それがかなりを占めている。ここには、当然かもしれないが、古典的な演目はみられない。自筆の新講談の原稿は当時の世相を反映した歴史資料として貴重である。新聞の切り抜きがはさまれていたり、素材となった雑誌が記されている場合もあり、それらを確認し、比較する作業が求められよう。

この資料群の眼目ともいうべきは『御座敷名簿・各席講題控』である。大正後期の演芸界を知る上で価値の高い自筆の記録である。日付欄のある帳面にていねいに記されており、二部に分かれる。

前半の御座敷名簿は、座敷がかかった場合の主催者、場所、演じた演目、仲介した（あるいは同行した？）人物名が書かれていると思われる。第一頁を〔**図版１**〕で示す。

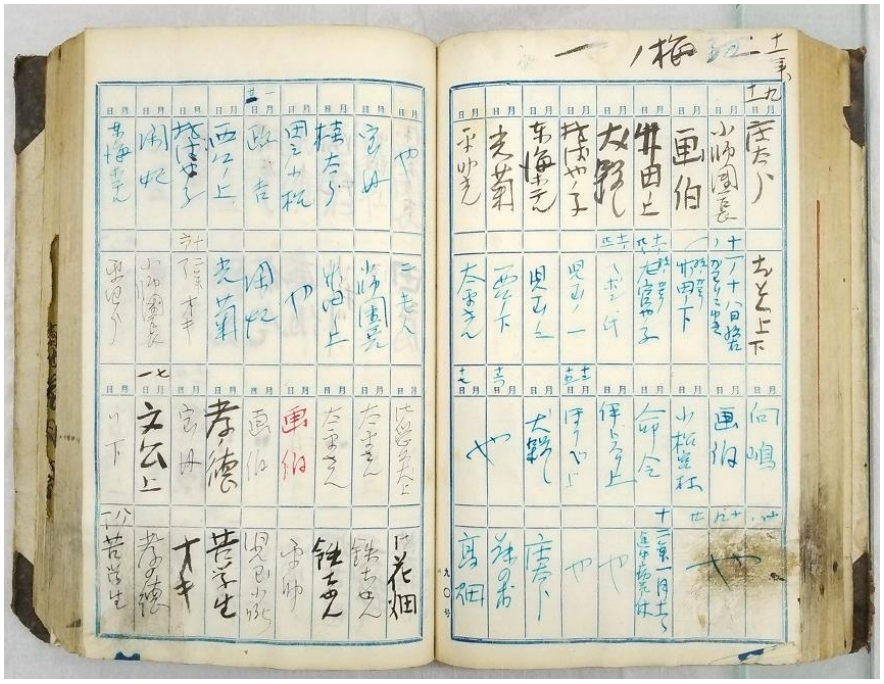


〔図版１〕

扉に注意書きがあり、依頼を受けた順に書き留めているため、日付に前後があると断っている。書き出しの大正九年正月四日を読むと、「「南陵」（注２）からの話があって、回生病院で余興が行われる予定であったが、無期延期になった」という意味かと解釈する。次は下に行き、正月十日、「材木商からの余興依頼、「堺宇」で「富士川初陣」を演じた」ということであろうか。「正」「＋」「○」は符牒と思われるが、不明。この１頁だけを見ても、注目しておきたいのは、演目に「富士川初陣」「赤垣」「ほりべ」が見られることである。「富士川初陣」は太閤記の藤吉郎初陣、「赤垣」は義士伝の赤垣源蔵、「ほりべ」は義士伝の堀部安兵衛ではないかと推測される（注３）。もちろん、新作派の演者であるから、内容はかなり改作されている可能性は考えられるが、一応古典講談と見られる。依頼者としては育英校、玉造橋学校などの学校関係が多く出てくる。今日でもこの傾向は普通のことかもしれないが、この人の場合、特に「教育的」要素の濃いことが歓迎されたと推察できる。また、桃谷順天堂などの大阪の大企業、財界人からの御座敷も確認でき、当時の社会情勢を窺うこともできよう。御座敷控えの最後は大正十五年四月二十四日「舛　今橋ホテル」。ここには演題が記されていない。演題のある最後は四月七日「立小便　ほりべ上　三宅　信濃橋　なだ萬」である。四月

二十四日の御座敷には行かなかった（病気等で行けなかった）と考えられる。

後半の各席講題控は、寄席出勤の記録である。吉本の本拠地ともいうべき南地花月亭の出番、大正九年正月上席からはじまり、席ごとにまとめて記している。当初のアキがなくなれば、「〇〇ノ二」といった形で書きついでいく。例として、紅梅亭のはじめの部分を出してみよう〔**図版２**〕。



〔図版２〕

（欄外）十一年　紅梅ノ一

九月十一日庄太郎／小師団長／画伯／竹田ノ上／犬殺し／そばやノ子／東海ホテル／光菊／平助さん／おとく上下／

十一ノ十八日　紋右かわりニゆき／紋ノかわり　竹田ノ下／十一ノ廿日　紋ノかわり左官や子／

十一ノ廿一　ヘボン氏／児玉ノ一／児玉ノ二／西郷ノ下／太平さん／向嶋／画伯／小松宮様／命令／伊トスリ上／十二月十五日　ほりべ上／犬殺し／十六日　十七日　や／十八日　十九日　廿日　や　（以下略）

このように毎日の演題をこまめに記している（注４）。「紋右かわりニゆき」というのは、舞踊の三舛家紋右衛門の代演という意味であろう。その他興味をひいた記事を拾いあげると、「大正十三年六月四日伯山独演会、倶楽部行」「大正十四年一月十四日　紅梅亭　遊三かわり」「大正十四年一月三十一日、新町（瓢亭）　長談会」「大正十四年六月二日三日　伯山独演会」「大正十四年八月十一日～十九日　天満花月　研究会」「大正十五年二月二十日　紅梅亭　講談三人会」など。

紅梅亭出演のはじめとなった大正十一年九月十一日という日付に注目したい。吉本が紅梅亭の経営をはじめたのが大正十一年九月。この時、周知のように、上方落語の歴史にとっては重大な出来事が起こった。三友派と花月連が合併となって、合同公演を三日初日で行った（『富士正晴記

念館所蔵　寄席番組類目録』所収の摺物など）。吉本は紅梅亭や新町瓢亭といった、桂派・三友派のかつての本拠地を傘下におさめた。残月は、九月上旬は京都の西陣の席・新京極芦辺館に出演していて、この紀念興行に加わっていないが、九月中席には紅梅亭・瓢亭にも出演している。この頃、一晩四席の掛け持ちが普通だったが、残月も主要な小屋三・四軒をほぼコンスタントに回っている。この時期、衰退期とはいえ、まだ落語家中心に座組されているが、吉本にとってこの人も貴重な戦力だったといえよう。

なお、最終の記事は大正十五年四月上席、天満花月・京三倶楽部・紅梅亭・三光館となっている。天満花月は「四月一日菓物や　（欄外）今男改名ヒル席」とあるだけで終わっているが、京三倶楽部・紅梅亭・三光館は十日まで演題が記されている（予定演目だったかもしれない）。ここまでの寄席出勤が確認できる。その後の消息は不明。

次にアルバムについてふれておこう。アルバムには 35 葉の写真が貼られているが、家族と思われる写真が 20 葉と半数以上を占めている。演芸に関係する集合写真もあるが、残月本人を確定するのはむつかしい。ただ、紛れもない本人と判断できた一枚があった。保存の悪い写真ながら掲出しておく〔**図版３**〕。御座敷がかかって口演に出向いた時のものと思われ、後ろに式次第が貼られている。それには「講演／　一　秀吉ノ青年時代　宇田川文海／余興　新講談　桂家残月」とあり、扇子で「新講談」を指しているように見える。短髪でやや面長、おとなしそうな眉と目、笑を浮かべたように見える唇。『落語系図』には、明治 36（1903）年１月 30 日撮影の集合写真があり、芸人名も記されている。前列右端に残月が出ており、28 歳の若い残月であるが、よく似ていると思う。伝統的な講釈師のいかめしいイメージとはほど遠い風貌といえよう。このイメージをもとに、『吉本興業百五年史』72・73 頁に載る大集合写真、大正十一年九月、吉本が大阪の演芸界を制覇した頃の写真を見ると、左下隅に落語家と距離をとる感じで、火鉢に手をかざしているのが、残月と思われる。遠慮がちに存在感を示している。吉本における彼の置かれていた位置を象徴しているように思うのである。この人の「新講談」を大正後期という時代を踏まえて、再評価しなければならないと感じている。

〔図版３〕

なお、本稿は残月資料整理の中間報告であり、調査不十分をお詫びしたい。後日何かの形でもう一度触れたいと思っている。また、『御座敷名簿・各席講題控』は各方面からのご教示を求めるのが最善の策と思われるため、全文翻刻紹介の準備をすすめている。

このあたりまで執筆した時、島田司書から「残月の写真のパネルとその元の写真が見付かった」という知らせを受けた。おそらくは同時に資料館に入ったものの、明らかに残月と判断され、しかも保存の良い写真のみ整理されたと推察される。パネルの裏には「桂家残月　講釈師」と書い

た説明テープもあり、展示に使用された痕跡をもとどめていた。元の写真は名古屋市南大津町の岩田写真館の台紙に貼られたもので、台紙の表紙に残月自筆で「大正十四年十月写ス　十一月名古屋市放送局ヨリ送付ノ品」と記されている。『御座敷名簿・各席講題控』に名古屋行きは記されていなかったが、十月中席は空白であった。この間に名古屋に行ったと思われる。先に述べた残月の容貌の特徴がこの一枚で確認できた〔**図版４**〕。

〔図版４〕

筆者にとって大きな発見ではありましたが、多くの人の手がすでに入っていたことを知りました。資料館発足時、資料収集に尽力された方々に、改めて御礼申し上げます。

注１、「点取り」については、晩年講釈師に転じた笑福亭円笑(二代目松鶴)のものについて触れたことがある。参照されたい（「池田文庫の落語資料」『館報　池田文庫』第九号、平成８（1996）年４月）。
注２、南陵は二代目旭堂南陵。この名は、大正十二年六月三日、同年七月五日、十四年十月卅日にも出ている。
注３、演目は略称のため確信はもてないが、太閤記物では「長短(槍試合)」、義士伝では「間喜兵衛」などの名も見られる。
注４、「や」は休演。他の箇所では、京三倶楽部の十一年七月廿一日「ゆけどやらず」。（７月 29 日）「間ニ合ハズゆかず」などの記録も出てくる。

桂家残月とレコード吹込

大西　秀紀
（資料整理・活用部会委員）
（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員）

大阪府立上方演芸資料館は、明治・大正期に活動した講談師桂家残月にまつわるいくつかの資料を所蔵しているが、その中のひとつに『御座敷名簿　各席講題控（以下・講題控)』がある。これは大正９（1920）年１月から大正 14(1925)年４月 24 日の間に、残月が寄席以外に出演した場所と演じた講題を自ら記した手控えで、その中にレコード会社での吹込（録音）に関する情報も記録されていることが今回の調査で判明した。一般にレコードに関する情報はレコード各社発行の月報類等から発売時期は分かるが、吹込時期について知るにはレコード会社の内部資料である吹込台帳を見なければならない。ただ残月が吹込をおこなった各社は現存しておらず、吹込台帳もすべて失われていると考えられるため、この講題控はレコード資料としても非常に重要な意味を持つといえる。本稿ではまず桂家残月のディスコグラフィを作成し、講題控に記された吹込に関する情報を検証したい（なお講題控以外の桂家残月資料については、本誌掲載の荻田清「発見！桂家残月資料」を参照されたい)。

桂家残月について

桂家残月（明治７（1874）年 11 月 28 日－大正 15（1926）年）は明治・大正期に活動した寄席色物芸人で、本名は一説に小野菊水。はじめ講釈の二代目錦城斎一山の門で菊水となったが、明治 30 年代に大阪へ移り、三友派、大八会などに参加。残月楼菊水また桂家残月の名で「新講談」「改良人情噺」を演じた。明治末には一時活動写真の弁士に転じたが、こちらは大正８（1919）年に廃業し[1)]、大正の中頃にはまた寄席に復帰。大正の末近くまで吉本の連名にみえる[2)]。

残月が明治 41（1908）年に九州へ巡業した際に、福岡県博多の新聞『九州日報』にインタビュー記事「残月の身上話」が７回にわたり連載された[3)]。その７月７日掲載分に「(前略）私の動作入立ばなしは東京ではめづらしいので人気を得まして毎年三ヶ月づゝ出席の約束が出来て居ります」と語っている。ここから当時すでに活動場所を大阪に移していたが、年に三ヶ月は東京

の席に出演していたことが伺える。一般に講談は釈台を張扇で叩きつつ物語を聞かせる芸だが、「動作入立ちばなし」ということは釈台を使わず、漫談のように立ったまま物語を聞かせたのだろうか。またこの記事では「トテも昔風のやりかたや普通の事では（講談は・引用者注）衰退するのみでありまする。西洋音楽と調和して琵琶でなし、うかれ節でなし、講談でなし、上るりでなし、一種不思議な者をやらふと考へて居り升。」とも語っていて、当時すでに講談の手法にこだわらない芸を模索していたことが伺える。そしてこの後大阪で活動写真の弁士に転じたようだ。

桂家残月ディスコグラフィ

番号	タイトル	レーベル	レコード番号	年	月	『講題控』記載事項
1	伏見宮殿下御美徳	ナショナル	A345/A346	大正6（1917）	12	該当なし
2	閑院宮妃殿下御慈悲	ナショナル	A365/A366	大正7（1918）	1	該当なし
3	故小松宮殿下御美徳	ナショナル	A291/A292		7-8	該当なし
4	三笠艦上の美談	東京蓄	1555/1556	大正8（1919）	5	該当なし
5	恋の乃木大将	東京蓄	1557/1558	大正8（1919）	6-8	該当なし
6	新派美談　公爵と百姓	東京蓄	1559/1560	大正8（1919）	9	該当なし
7	故竹田宮殿下と学生	バタフライ	不詳	大正10（1921）	10	大正10年7月11日 酒井公声堂 竹田ノ下
8	故北白川宮殿下と愛犬	バタフライ	不詳	大正11（1922）	1	大正10年7月11日 酒井公声堂 犬殺し
9	乃木将軍と芸者お徳	トーア	不詳	大正12（1923）	12	大正12年11月20日　ハト吹込　おとく上
10	御成婚記念　東宮殿下の巻	ニットー	1130	大正13（1924）	2	大正12年11月14日 日東吹込 八嶋 国母
11	御成婚記念　良子女王殿下の巻	ニットー	1131		2	大正12年11月14日 日東吹込 ほくろ 良子
12	堀部安兵衛	トーア	不詳		3	大正12年11月20日 ハト吹込 ほりベノ上
13	銀婚御式記念　今上陛下塩原御美談	アサヒ	224	大正14(1925)	5	大正14年3月2日 アサヒ蓄音キ 塩原
14	銀婚御式記念　国母陛下沼津御美談	アサヒ	225		5	大正14年3月2日 アサヒ蓄音キ 沼津
15	御銀婚式記念　聖上陛下の巻	ニットー	1508-9		5	該当なし
16	恋の乃木さん	オリエント	3106		7	大正14年5月9日 オリエント 恋ノ乃木
17	兒玉大将の立小便	内外	1525/1526	大正14-15	？	大正14年11月3日 貝印吹込 立小便
18	軍馬の去勢	内外	1527/1528	大正14-15	？	大正14年11月3日 貝印吹込
19	教育講談　故加藤首相　青年時代ノ逸話	特許	355/356	大正15(1926)	2	大正15年2月1日 酒井公声 加藤ノ上
20	乃木大将と兒玉大将	特許	420/421		？	大正15年2月1日 酒井公声 乃木児玉
21	乃木将軍と命令宿	ヒコーキ	7520		10	大正14年11月16日 命令
22	教育講談　秩父宮殿下御高徳	特許	不詳	昭和2(1927)	2	大正15年2月1日 酒井公声 秩父ト
23	軍事美談　南京松	ヒコーキ	不詳		3	大正14年10月8日 合同蓄音 南京松

図　1　桂家残月ディスコグラフィ

図１は現在発売が確認された桂家残月の SP レコード 22 種 23 枚のディスコグラフィ（音盤目録）である。レコード各社発行の月報類等[5)]からの情報をまとめ、発売時期の順に並べた。各行先頭の番号は文中でレコード盤を指し示すために付けたもので、それ以上の意味はない。

残月のレコードは（15）のニットー盤のみが２枚組で、あとはすべて１枚物である。内容は（12）「堀部安兵衛」を除くと、新聞記事を元ネタとした[4)]皇室関係者や軍人の美談である。残月のレコードデビューと考えられる(1)-(3)のナショナル盤三種は、同社のカタログでは「活動講談」というジャンルになっているが、このレコードを吹込んだ頃残月は活動写真の弁士をしていたので、内容は活動写真とは直接の関係はないもののこのような名称が付いたのだろう。ナショナルレコードは製造元の大阪蓄音機が大正７(1918)年３月に東洋蓄音器（東洋蓄）と合併し、その商品の一部はオリエントレコードとして再発売され、その後東洋蓄が日本蓄音器商会（日

蓄）と合併後もオリエントのカタログに残った。図１ではオリエント盤は(16)のみだが、実際は（１）～（３）の再プレスが３種あるため、最終的にオリエント盤は都合４種ということになる。当館所蔵の（２）「閑院宮妃殿下御仁徳」は日蓄との合併後の盤である（図２）。

図２　閑院宮妃殿下御仁徳（当館所蔵）

講題控に記載された情報が表１右の「『講題控』記載事項」である。講題は「竹田ノ下」というような略称で記されているため、レコードタイトルと一致していると判断しにくいものもあるが、概ね合致していると思われる。ただ講題控の大正 11 年４月 13 日の項には「日東蓄音　竹田ノ手袋、小杉「小師団長　」とあり（p.12)、ニットーレコードに吹込んだことを窺わせるが、残月のニットー盤はカタログ上は(10)(11)(15)の３種４枚を確認するのみで、この「竹田ノ手袋」等はレコード化されなかった可能性がある。

吹込まれてからレコードが発売されるまでの間隔はまちまちで、(19）のように吹込と同月に発売されるものもあれば、(21)のように一年近く間隔が開くものもある。(23）の演者名は「故・桂家残月」となっていて、元来お蔵入りになっていたものが追悼盤のようなかたちで発売されたのではないだろうか。

図１のレーベルの項を見るとその種類は 10 種におよび、東京蓄とヒコーキを除くと大正後期の京（オリエント）・阪（ナショナル、バタフライ、ニットー、トーア、特許）・神（内外）および名古屋（アサヒ）と、関西と名古屋のほぼすべてのレーベルを制覇した感がある。ヒコーキは東京の合同蓄音器のレーベルだが、(21)(23)は関東大震災後に大阪に設けられたスタジオで吹込まれた。このことからも、レコード各社は自社のカタログに残月の美談モノを置こうとしたことが分かる。その一方で、残月のレコードはいずれも一社あたり多くて３種類程度で、それ以上品数を増やしても、需要は見込めないと各社は判断したのではないだろうか。

ラジオ出演

講題控にはレコード吹込以外にラジオ番組の出演も記されている。まだ仮放送の時期で、大阪では三越百貨店大阪店屋上に放送所があった。残月は大正 14(1925)年 10 月４日と 10 日に出演

している。大阪朝日新聞の朝刊第１面の「今日の放送」を見ると４日は昼、10 日は夜の出番だった。

10 月４日　講談　加藤高明子爵の出世美談　岡本義雄

10 月 10 日　講談　大西郷逸話　岡本義雄

演者の岡本義雄とは残月のことだろう。講題からもそれは明らかである。残月は当時吉本の所属だったが、放送開始の頃から吉本は所属芸人のラジオ出演を禁止していたため[6]、芸名では出演できず変名を使ったと思われる。

以上、講題控から桂家残月のレコード吹込時期とラジオ出演を紹介したが、講題控は晩年の残月の活動状況を知るための第一級の資料であることは言うまでもない。当資料から残月の寄席出演以外の活動を明らかにすることを今後の課題としたい。

【註】

１）　片岡一郎『活動写真弁史』、共和国、2020、pp.566

２）　倉田・藤波編『日本芸能人名事典』、三省堂、1995、pp.236

３）　「上方落語史料集成」（http://blog.livedoor.jp/bunnzaemon/　参照 2022 年 8 月 9 日）

４）　３）に同じ

５）　倉田喜弘『演芸資料選書４　演芸レコード発売目録』国立劇場、1990

ニットータイムス、ナショナルレコード一枚刷総目録、ツル印総目録、『蓄音器世界』、『音楽と蓄音機』等

６）　『吉本八十年の歩み』、吉本興業、1992、pp.31

企画展示「演芸人さんと言葉」展の紹介

大村　一人（上方演芸資料館学芸員）

（１）はじめに

ワッハ上方の企画展示エリアでは、年度の企画において、１人（１組）の演芸人に焦点をあて、その芸や功績から上方演芸の魅力を紹介する「特別展」と、様々な切り口でもって上方演芸の魅力を紹介する「企画展示」が催される。

今回は令和３年度下半期に催された企画展示「演芸人さんと言葉」展の概要について紹介する。

当館の「企画展示」の方針として、次の３つがある。

・収蔵資料を活用しながらも、常設展示とは異なる新たな切り口で、上方演芸に親しんでいただけるような展示を行うこと。
・落語、漫才、講談、浪曲、上方喜劇、諸芸といった幅広いジャンルの上方演芸をとりあげ、世代やプロダクションの垣根を超えた展示をつくること。
・上方演芸の歴史にもふれること

令和３年度の企画展示「演芸人さんと言葉」展もこの方針に沿って企画した。

（２）『演芸人さんと言葉』展の概略

演芸人が巧みにあやつる言葉は、笑いを誘うだけでなく、魅力的な登場人物を演じるなど演芸の世界を作り上げている。演芸人自身が大事にしてきた言葉や演芸人がファンにプレゼントした色紙に書き込む言葉の数々を紹介し、演芸の魅力を紹介する。

「周年を迎えられた方」「襲名された方」「賞を受賞された方」など、演芸人として、大きな節目を迎えた方々の「言葉」にまつわるエピソード等を月替わりで紹介した。また、その演芸人に関係する資料（ワッハ上方の収蔵資料）を展示し、展示をより深みのあるものにした。

展示内容は、演芸人のサイン色紙を展示するとともに、サイン色紙のメッセージに込められた思い、エピソード等について、演芸人にインタビューを行い、その内容をパネルにして、写真とともに展示した。

インタビューの質問内容は、演芸人が来館者に伝えたいこと、来館者が演芸人に聞いてみたいと思われることをベースに、何度も考察を繰り返し決めた。

（３）具体的な演芸人のインタビュー内容

今回ご協力いただいた演芸人は以下のとおり。（敬称略）

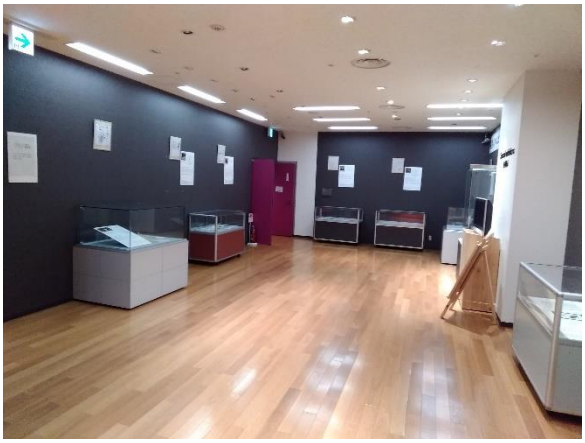
かしまし娘の正司歌江、四代目桂福団治、西川きよし、三代目桂南光、松浦四郎若、旭堂南鱗、二代目桂八十八、沢村さくら、笑福亭喬介、ビスケットブラザーズ　計 11 人（10 組）。

協力いただいた演芸人のサイン色紙には、次のように書かれている。
〇正司歌江　「幸福みえますか」
〇桂福団治　「酒よりも　人の話しに　酔わされて」
〇西川きよし　「ちいさなことからコツコツと」（手拭いに書かれたメッセージ）
〇桂南光　「五風十雨」
〇松浦四郎若　「泣かされて　今泣く人は　又笑う　泣かした人は　いつか又泣く」
〇旭堂南鱗　「朝日うけ　光るうろこや　出世魚」
〇沢村さくら　「一心に」
〇笑福亭喬介　「笑えるから楽しい　楽しいから笑える」
〇ビスケットブラザーズ　「猿楽からはじまった芸能が　我らの手により豚楽へ」
〇桂八十八　名前だけのサイン色紙

そして、差し上げた質問は以下のとおりである。
「演芸人になろうと決めた時に、背中を押してくれたのは誰のどのような言葉ですか」
「修行中に糧にした言葉はありますか」
「師匠からもらった言葉で印象に残っている言葉はありますか」
「ファンからもらった言葉で一番印象に残っているものはありますか」
「サイン色紙に記したメッセージはどのような気持ちで書いたものですか」
「このメッセージ以外に、色紙に記入するものはありますか」
「こんなところにもメッセージを書いたことがあると言うエピソードはありますか」
「〇〇（落語、漫才、浪曲、講談、曲師）の魅力を語っていただけますか」
「演芸ファンにひと言」
以上の質問に対しての返事が書かれたキャプションを、月替わりに展示する形式をとった。

具体的な返答としては、「演芸人になろうと決めた時に、背中を押してくれたのは誰のどのような言葉ですか」に対して、桂福団治さんは、「この世界に入る時は、家族からは反対されていたので、背中を押すような言葉はなかった。でも、父親が『男子志をたてて郷関をでず　学若し成らずんば　死すとも帰らず』と家を出る時に吟じてもらった。落語の道を極める決心を固めた」と語られた。

「修行中に糧にした言葉はありますか」に対して、旭堂南鱗さんは「二代目神田山陽師からの言葉で『芸の道に限りなし。死ぬまで修行』、その言葉を聞いて、どこまでやれるかは分からないけど、辞めずに講談を続けようと思った。」と語られた。



「師匠からもらった言葉で印象に残っている言葉はありますか」に対して、桂八十八さんは、「（師匠の三代目桂米朝さんをあげて）知らないことは正直に知らないといいなさい。知らないことを『知りません』ということは決して恥ではない。知ったかぶりをして『知っています』って言うてずっと知らないでおることの方が恥や」と語られた。

「ファンからもらった言葉で一番印象に残っているものはありますか」に対して、西川きよしさんは、「たくさんの方に声をかけていただきました。『がんばりや』という言葉が素直にうれしいですね」と語られた。「言葉には声の高低、イントネーション、聞く側への伝わり方で意味が変わってきこえることがありますが、この言葉にはそのような違いがないと思います」と語られた。

「サイン色紙に記したメッセージはどのような気持ちで書いたものですか」に対して、正司歌江さんは、「『幸福みえますか』を色紙に書き始めて半世紀は過ぎるでしょうか。若い頃、不平不満ばかり言っていた私があるとき、ふと小さな幸せを感じたことがありました。それからは次から次へと、物事に感謝する心が大きく育ちました。色紙を貰ってくださった人々に“あなたにも幸せがありますヨ。気づいて下さい、そして感謝してください”という気持ちで書きました」と語られた。

「このメッセージ以外に、色紙に記入するものはありますか」に対して、松浦四郎若さんは、「『思無邪』。孔子の言葉だったと思います。自分を表す言葉だと思っています。他には『気に入らぬ　風もあろうに　柳かな』も書きます。仏教から引用した言葉で、置かれた立場で流れに身を任せたいという意味だったかと思います。」と語られた。

企画展の様子

「こんなところにもメッセージを書いたことがあると言うエピソードはありますか」に対して、桂南光さんは、「飲み屋さんで会った人が、奥さんがファンだからサインを書いてほしいとお願いされ、色紙がなかったので、箸袋の裏にサインを書いたことがあります。暫くして、その箸袋がないと思ったら、その人が話をしながらこよりにしていたんですね（笑）。「こよりになってますよ」と言ったら「これでも嫁さんは喜ぶと思います」と言われました」と語られた。

「〇〇（落語、漫才、浪曲、講談、曲師）の魅力を語っていただけますか。」に対して、沢村さくらさんは、「私は、節と三味線の『間』、グルーヴ感を楽しみに聞いていました。最近は、物語の持つ力が気になってきています。聴き続けると、新しい楽しみ方ができて、色んな楽しみ方ができると思います。」と語られた。

「演芸ファンにひと言」に対して、笑福亭喬介さんは、「生で落語を見に来てほしいです。私の落語をテレビやYouTubeでも見ることはできますが、画面の中の自分は、平面なので20%くらいしか面白さが伝わっていないと思うんです。劇場や寄席で、周りのお客さんと笑って、一緒に楽しんでいただきたいと思います」と話された。また、ビスケットブラザーズのお二人は、「古典芸能や芸能文化をいろいろと学んだうえで、何故かこうなっちゃいました。よろしければ、僕らの漫才を見に来てください」と声を揃えて話された。

発せられた（書かれた）個性豊かな言葉により、普段見ることができない演芸人の姿を垣間見ることができ、演芸ファンの方はもとより演芸ファンでない方も、より演芸の魅力に近づけたのではないかと考える。

（４）展示された主な資料

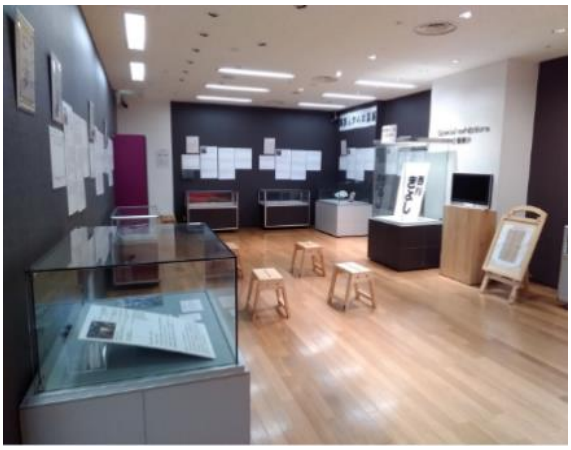
「演芸人さんの言葉」に関しては、壁に紹介したが、演者に関する資料も、収蔵庫にあるものを選んで展示した。下記は展示資料の主なものである。（敬称略）

かしまし娘…砂川捨丸追善興行のパンフレット
桂福団治…書籍「誰でもできる　手話小話咄集」「上方落語はどこへゆく」
西川きよし…なんば花月のめくり
桂南光…桂枝雀一門の手拭い（桂べかこ（現三代目桂南光）が描いた一門の噺家のイラストがプリントされた手拭い）
旭堂南鱗…真打昇進披露口上
松浦四郎若…浪曲教室　発表会パンフレット
沢村さくら…沢村さくら、真山隼人手書きジャケットのお手製CD
桂八十八…扇子
笑福亭喬介…ワッハ上方のワークショップ出演時にいただいたサイン色紙
ビスケットブラザーズ…特になし

企画展の様子

（５）インタビュー日と場所（敬称略）

・８月４日　旭堂南鱗：阿倍野駅前の喫茶店にて
・８月５日　松浦四郎若：天王寺駅前の喫茶店にて
・８月６日　桂福団治：松竹芸能内事務所にて
・8月15日　西川きよし：なんばグランド花月にて
・8月16日　沢村さくら：阿倍野駅前の喫茶店にて
　　桂南光：米朝事務所にて
　　桂八十八：米朝事務所にて
・8月19日　笑福亭喬介：松竹芸能内事務所にて
・９月６日　ビスケットブラザーズ：なんばグランド花月にて
・正司歌江：直接のインタビューはなく、メールでやりとりをした。


企画展の様子

（６）令和３年度の他の展示（敬称略）

令和３年度の上半期の特別展は「夢路いとし・喜味こいし　上方漫才を支えた兄弟コンビ展」を実施した。それ以外に「ワッハ上方 25 周年」を記念して、漫才、落語、浪曲、講談の殿堂入り名人から各２人ずつの紹介する展示も行った。

夢路いとし・喜味こいしの二人は、役者の両親とともに地方巡業で子役として舞台に立ち、昭和 12（1937）年、荒川芳丸に入門し、荒川芳博・芳坊の名で漫才師としてのキャリアをスタートさせた。二人のしゃべくり漫才は「上方漫才の最高峰」「上方漫才の至宝」と称され、兄弟の漫才コンビとして、昭和から平成にかけて長く活躍した。遺族の方やプロダクションの協力もいただいて、多くの来館者に二人の軌跡を味わっていただいた。

「ワッハ上方 25 周年」を記念して企画展示室の一部をつかって催した。漫才では「中田ダイマル・ラケット」と「人生幸朗・生恵幸子」、落語では「二代目露の五郎兵衛」と「橘ノ圓都」、浪曲では「梅中軒鶯童」と「二代目春野百合子」、講談では「二代目旭堂南陵」と「三代目旭堂南陵」の紹介を行った。

また、令和２年度の「上方演芸の殿堂入り」名人となったゼンジー北京の紹介も同様に行った。

（７）おわりに

まずは、この企画に関して、ご協力いただいた演芸人やプロダクションの方々に御礼申し上げたい。貴重な時間を融通していただき、感謝の念に堪えない限りである。

インタビューを通して演芸人にアプローチさせていただき、演芸人の様々な顔をみせていただいた。実際の演芸人とのインタビューでは沈黙が続く方もいれば、色々な話をしていただく方もいた。エピソードも含め、演芸人の意外な面もキャプションにできる限り反映させたつもりである。

演芸人の意外な一面やエピソードなども含め、様々な情報をキャプションを通して多くの方々に伝えたいと思い企画した言葉展であるが、演芸人にしゃべっていただいた言葉をキャプションの文字にする難しさを感じた。語る言葉には感情なども籠っているため、文字にするのは本当に難しい。できる限り、多くの方々に「言葉」を伝えられたと思うが、やはり、実際の高座（舞台）

を見て、そこから醸し出されるもの感じとることが、演芸人を知る上で一番の近道と思われる。
　また、コロナ対策には今まで通り、万全を期して臨んだことも付け加えておきたい。

二代目旭堂南陵、三代目旭堂南陵の資料

＜参考文献＞
大阪ゲラゲラ学会　『もうひとつの上方演芸』　（株）たちばな出版　1997
相羽秋夫　『現代上方演芸人名鑑』　（有）少年者　1980
三田純一　『昭和上方笑芸史』　學藝書林　1993
倉田喜弘・藤波隆之　『日本芸能人名事典』　三省堂　1995
大阪府立上方演芸資料館　『上方演芸大全』　創元社　2008

収蔵資料の紹介（資料整理の現場から）

寄贈ＳＰレコードの紹介

大西　律子（上方演芸資料館学芸員）

ここでは、令和３年度に収蔵資料として新しく登録したＳＰレコードを紹介したい。

平成 31(2019)年１月、当館リニューアルオープンの前に「親が集めていた浪曲や落語などのレコードがたくさんあるので、店舗の引っ越しを機に寄贈したい」とのお申し出があった。その後、調査や寄贈受け入れ手続きを経て、資料登録作業を行ったものである。

ご寄贈いただいたＳＰレコードの内訳は、落語 14 枚・漫才/漫芸１枚・浪曲 53 枚・漫談１枚・漫芸１枚・都々逸３枚・女義太夫(女流義太夫)１枚・義太夫５枚の合計 79 枚。

次に示すリストに、ＳＰレコード 79 枚の調査・登録内容をまとめている。

書誌番号	ジャンル	タイトル	演　者	レーベル	レコード番号	発売時期	重複なし
66098	落語	阿弥陀池(1)(2)	初代桂春団治	ニットー	4227	昭和5(1930)年10月	
66099	落語	阿弥陀池(3)(4)	初代桂春団治	ニットー	4228	昭和5(1930)年10月	
66100	落語	黄金の大黒(1)(2)	初代桂春団治	ポリドール	716	昭和6(1931)年1月	
66101	落語	黄金の大黒(3)(4)	初代桂春団治	ポリドール	717	昭和6(1931)年1月	
66102	落語	三十石(1)(2)	初代桂春団治	ニットー	5969	昭和8(1933)年3月	
66103	落語	三十石(3)(4)	初代桂春団治	ニットー	5970	昭和8(1933)年3月	
66104	落語	三人道中(1)(2)	初代桂春団治	リーガル	65319	昭和8(1933)年1月	
66105	落語	三人道中(3)(4)	初代桂春団治	リーガル	65320	昭和8(1933)年1月	
66106	落語	猫の災難(1)(2)	初代桂春団治	タイヘイ	11180	初出3678-3679 昭和7(1932)年11月	
66107	落語	猫の災難(3)(4)	初代桂春団治	タイヘイ	11181	初出3678-3679 昭和7(1932)年11月	
66108	落語	へっつい盗人(1)(2)	初代桂春団治	オリエント	60504	昭和6(1931)年8月	
66109	落語	へっつい盗人(3)(4)	初代桂春団治	オリエント	60505	昭和6(1931)年8月	○
66110	落語	餅搗き(1)(2)	初代桂春団治	タイヘイ	3735	昭和7(1932)年12月	
66111	落語	餅搗き(3)(4)	初代桂春団治	タイヘイ	3736	昭和7(1932)年12月	
66112	漫才/漫芸	ワカナのジャングルを征く/楽しき演芸館	玉松ワカナ・一郎/新興快速舞隊(あきれたぼういず改メ)	テイチク	T3316	昭和17(1942)年6月 名人会寄席夕第二輯	
66113	浪曲	会津の小鉄(加茂の磧)(1)(2)	京山幸枝	レゾナー	R315	初出ニットー5275 昭和6(1931)年8月	○
66114	浪曲	会津の小鉄(加茂の磧)(3)(4)	京山幸枝	レゾナー	R316	初出ニットー5276 昭和6(1931)年8月	○
66115	浪曲	会津の小鉄(とん久の義侠)(1)(2)	京山幸枝	タイヘイ	10443	昭和6(1931)年9月? 昭和9(1934)年1月?	○
66116	浪曲	会津の小鉄(とん久の義侠)(3)(4)	京山幸枝	タイヘイ	10444	昭和6(1931)年9月?	○
66122	浪曲	大岡政談(石子伴作)(1)(2)	京山小円	コロムビア	25294	初出ニッポノホン16835 昭和3(1928)年4月	○
66123	浪曲	大岡政談(石子伴作)(3)(4)	京山小円	コロムビア	25295	初出ニッポノホン16836 昭和3(1928)年4月	○
66134	浪曲	義民伝(宗五郎子別れ)(1)(2)	京山小円	コロムビア	25057	初出ニッポノホン15253 大正13(1924)年3月	
66135	浪曲	義民伝(宗五郎子別れ)(3)(4)	京山小円	コロムビア	25058	初出ニッポノホン15254 大正13(1924)年3月	

書誌番号	ジャンル	タイトル	演　者	レーベル	レコード番号	発売時期	重複なし
66137	浪曲	五郎正宗(1)(2)	京山小円	コロムビア	25280	昭和3(1928)年12月	
66138	浪曲	五郎正宗(1)(2)	京山小円	コロムビア	24118	初出ニッポノホン16894 昭和3(1928)年6月	
66139	浪曲	五郎正宗(3)(4)	京山小円	コロムビア	24119	初出ニッポノホン16895 昭和3(1928)年6月	
66144	浪曲	佐倉の曙義民伝(東叡山直訴)(1)(2)	京山小円	コロムビア	24114	初出ニッポノホン15510 大正14(1925)年1月	
66145	浪曲	佐倉の曙義民伝(東叡山直訴)(3)(4)	京山小円	コロムビア	24115	初出ニッポノホン15511 大正14(1925)年1月	○
66156	浪曲	乃木将軍と辻占売り(前編)(1)(2)	寿々木米若	テイチク	1111	昭和12(1937)年1月	
66157	浪曲	乃木将軍と辻占売り(前編)(3)(4)	寿々木米若	テイチク	1112	昭和12(1937)年1月	
66158	浪曲	乃木将軍と辻占売り(後編)(3)(4)	寿々木米若	テイチク	1114	昭和12(1937)年1-2月?	
66146	浪曲	祖国の花嫁(後編)(1)(2)	二代目天中軒雲月	テイチク	2495	昭和14(1939)年1月	
66130	浪曲	紀文売出す(1)(2)	梅中軒鶯童	テイチク	N340	昭和14(1939)年12月	○
66131	浪曲	紀文売出す(3)(4)	梅中軒鶯童	テイチク	N341	昭和14(1939)年12月	○
66132	浪曲	紀文売出す(5)(6)	梅中軒鶯童	テイチク	N342	昭和14(1939)年12月	○
66133	浪曲	紀文売出す(7)(8)	梅中軒鶯童	テイチク	N343	昭和14(1939)年12月	○
66147	浪曲	吃又大津絵道中(1)(2)	梅中軒鶯童	テイチク	A213	昭和15(1940)年9月	○
66148	浪曲	吃又大津絵道中(3)(4)	梅中軒鶯童	テイチク	A214	昭和15(1940)年9月	○
66149	浪曲	吃又大津絵道中(5)(6)	梅中軒鶯童	テイチク	A215	昭和15(1940)年9月	○
66150	浪曲	吃又大津絵道中(7)(8)	梅中軒鶯童	テイチク	A216	昭和15(1940)年9月	○
66160	浪曲	吉原百人斬(戸田川の恨み)(1)(2)	梅中軒鶯童	タイヘイ	10106	初出6040 昭和9(1934)年10月	○
66161	浪曲	吉原百人斬(戸田川の恨み)(3)(4)	梅中軒鶯童	タイヘイ	10107	初出6041 昭和9(1934)年10月	○
66162	浪曲	吉原百人斬(斬り込み)(1)(2)	梅中軒鶯童	タイヘイ	10110	初出6091 昭和9(1934)年12月?	○
66163	浪曲	吉原百人斬(斬り込み)(3)(4)	梅中軒鶯童	タイヘイ	10111	初出6091 昭和9(1934)年12月?	○
66164	浪曲	吉原百人斬(故郷の別れ)(1)(2)	梅中軒鶯童	タイヘイ	10290	昭和13(1938)年9-10月?	
66165	浪曲	吉原百人斬(故郷の別れ)(3)(4)	梅中軒鶯童	タイヘイ	10291	昭和13(1938)年9-10月?	○
66124	浪曲	鬼吉の度胸(続編) 富士川の血煙(1)(2)	広澤虎造	テイチク	1853	初出15058 昭和9(1934)年11月	○
66125	浪曲	鬼吉の度胸(続編) 富士川の血煙(3)(4)	広澤虎造	テイチク	1854	初出15058 昭和9(1934)年11月	○
66126	浪曲	お萬の度胸(1)(2)	広澤虎造、美家好(三味線)	テイチク	N344	昭和15(1940)年?	○
66127	浪曲	お萬の度胸(3)(4)	広澤虎造、美家好(三味線)	テイチク	N345	昭和15(1940)年?	
66128	浪曲	お萬の度胸(5)(6)	広澤虎造、美家好(三味線)	テイチク	N346	昭和15(1940)年?	
66129	浪曲	お萬の度胸(7)(8)	広澤虎造、美家好(三味線)	テイチク	N347	昭和15(1940)年?	
66136	浪曲	吉良の仁吉(7)(8)	広澤虎造	テイチク	2841	昭和15(1940)年2月	
66140	浪曲	最後の荒神山(1)(2)	広澤虎造	テイチク	A435	昭和16(1941)年11月臨	
66141	浪曲	最後の荒神山(3)(4)	広澤虎造	テイチク	A436	昭和16(1941)年11月臨	
66142	浪曲	最後の荒神山(5)(6)	広澤虎造	テイチク	A437	昭和16(1941)年11月臨	
66143	浪曲	最後の荒神山(7)(8)	広澤虎造	テイチク	A438	昭和16(1941)年11月臨	
66151	浪曲	仁吉男の歌(1)(2)	広澤虎造、美家好(三味線)	テイチク	A183	昭和15(1940)年8月臨	
66152	浪曲	仁吉男の歌(3)(4)	広澤虎造、美家好(三味線)	テイチク	A184	昭和15(1940)年8月臨	
66153	浪曲	仁吉男の歌(7)(8)	広澤虎造、美家好(三味線)	テイチク	A186	昭和15(1940)年8月臨	
66154	浪曲	仁吉男の歌(9)(10)	広澤虎造、美家好(三味線)	テイチク	A187	昭和15(1940)年8月臨	

書誌番号	ジャンル	タイトル	演　者	レーベル	レコード番号	発売時期	重複なし
66155	浪曲	仁吉男の歌(11)(12)	広澤虎造、美家好(三味線)	テイチク	A188	昭和15(1940)年8月臨	
66159	浪曲	森の石松(三十石道中)(3)(4)	広澤虎造	テイチク	1507	昭和12(1937)年11月	
66117	浪曲	天野屋利兵衛(3)(4)	冨士月子	ニットー	S1700	初出タイヘイ15404 昭和11(1936)年8月	○
66118	浪曲	大石山鹿護送(1)(2)	三代目吉田奈良丸	タイヘイ	5053	昭和7(1932)年12月	
66119	浪曲	大石山鹿護送(3)(4)	三代目吉田奈良丸	タイヘイ	5054	昭和7(1932)年12月	○
66120	浪曲	大石廓通い(1)(2)	三代目吉田奈良丸	タイヘイ	5055	昭和8(1933)年1月	
66121	浪曲	大石廓通い(3)(4)	三代目吉田奈良丸	タイヘイ	5056	昭和8(1933)年1月	
66166	漫談	浪曲学校(上)(下)	井口静波	キング	11007	昭和11(1936)年10月	○
66175	漫芸	三亀松漫芸 三亀松の慰問袋(上)(下)	柳家三亀松、 三味線・囃子(伴奏)	リーガル	69517	昭和14(1939)年6月	
66173	都々逸	小唄 都々逸/小唄 都々逸(馬子唄入)	柳家三亀松	リーガル	68268	昭和12(1937)年2-3月?	○
66174	都々逸	都々逸 声色入 河内山玄関先/ 都々逸 新内入 水野草庵子作・みの吉殺し	柳家三亀松	リーガル	67594	昭和11(1936)年1-2月?	
66176	都々逸	三亀松漫芸 都々逸(新内入り)/ 三亀松漫芸 都々逸(台詞入り)	柳家三亀松	リーガル	69362	昭和14(1939)年2月	
66172	女義太夫	壺坂(呂昇サワリ集の中)(上)(下)	豊竹呂昇	コロムビア	25429	昭和4(1929)年2月	○
66167	義太夫	朝顔日記(宿屋の段)(3)(夫を慕う念力に)/ 朝顔日記(宿屋の段)(4)(思えば此身は先の世で)	竹本綾太夫(太夫)、 豊澤新左衛門(三味線)	ビクター	53041	昭和9(1934)年5月	○
66168	義太夫	太功記十段目(1)(2)	竹本南部太夫、 野沢吉弥(三味線)	ニットー	5044	昭和6(1931)年1-2月?	○
66169	義太夫	太功記十段目(3)(4)	竹本南部太夫、 野沢吉弥(三味線)	ニットー	5045	昭和6(1931)年1-2月?	○
66170	義太夫	堀川猿回し(1)(2)	竹本南部太夫、野澤吉弥(糸)、 野澤八造(ツレ)	ニットー	5445	昭和7(1932)年1月	○
66171	義太夫	堀川猿回し(3)(4)	竹本南部太夫、野澤吉弥(糸)、 野澤八造(ツレ)	ニットー	5446	昭和7(1932)年1月	○

寄贈ＳＰレコード 79 枚のうち、これまで当館にて所蔵のなかったものは 34 枚あり、該当するレコードについては上に示すリストの右端欄に○を記した。34 枚のレコードは、当館で全く所蔵していなかったもののほかに、同タイトルのなかで一部欠けていた巻号、同タイトル・同レーベルでレコード番号が違っているものなどもあった。ジャンルごとの内訳は、落語・漫談・都々逸・女義太夫が各１枚、浪曲が 25 枚、義太夫節が５枚となっている。

そして、今回ＳＰレコードをご寄贈いただいたことにより、レコード本体と歌詞カードが揃ったものが１組ある。それは、井口静波の「浪曲学校(上)(下)」である。このタイトルに関しては今まで歌詞カードのみを所蔵しており、レコード本体の所蔵はなかった(「浪曲学校」歌詞カードの資料コード：00201491)。ジャンルは「漫談」、タイトルは「浪曲学校」というこのレコードは、歌詞カードによると、教師と生徒によって浪曲の授業が面白おかしく繰り広げられるという内容で、そのなかには「紺屋高尾」や「五郎正宗」、吉田奈良丸など、当時人気のあった浪曲の演目や実在した浪曲師の名前が盛り込まれている。

また、79 枚の寄贈ＳＰレコードは、いずれも大正 13(1924)年から昭和 17(1942)年の間に発売されたもので、このコレクションからは上方演芸の歴史の一端をうかがうことができる。

大正時代末から昭和の初めにかけては、明治時代から続く日本の近代化によって工業が盛んになり、地方から都市へと人口が集中するようになった時期である。その結果、娯楽は都市に住む

人々だけでなく、地方から都市に移り住んだ人々にも分かりやすく楽しめるものが好まれるようになり、上方の演芸もこの影響を受けることとなった。近代化以前より大阪に住む人々は、自らの生活が題材となっている落語を好んだが、労働のために大阪に移った人々は、大阪の習慣を知らずとも楽しめる漫才を好んだのである。

これまで寄席の中心であった落語は、芸の方向性の違いにより、伝統的な落語を重視するグループや賑やかで楽しめる芸をよしとするグループに分裂し、そして衰退の様相を見せはじめる。人気の陰りはじめた落語に代わって台頭してきたのは、漫才である。大正時代に吉本が大阪の寄席を制覇すると、寄席では漫才が多く演じられるようになった。そして、昭和に入ると、これまでの「萬歳」「万歳」「万才」などとは異なる新たな表記「漫才」と、しゃべくり漫才が生まれて、多くの漫才師が寄席を彩った。

砂川捨丸は従来の芸づくし漫才を「高級萬歳」と銘打ち、紋付羽織に袴姿で演じて人気を得た。また、しゃべくり漫才は当時の出来事や流行を題材にした誰もが楽しめる漫才で、瞬く間に大人気となり、横山エンタツ・花菱アチャコ、ミスワカナ・玉松一郎らが活躍した。こうして、落語は漫才にその人気をとってかわられるようになってしまった。

このように、落語が逆境の時代を迎えつつあるなかでも、変わらず絶大な人気を誇ったのが初代桂春団治（通説による）である。初代桂春団治は、従来の落語に工夫を加えて笑いを追及し、多数のＳＰレコードに落語を吹き込んだ。そのレコードは、昭和９(1934)年に亡くなった後も戦後まで売れ続けるほどの人気であった。今回ご寄贈いただいた 14 枚の落語ＳＰレコードがすべて初代桂春団治のものであるのも、この人気を反映しているかのように思われる。一方、漫才/漫芸のレコードは１枚ではあるものの、玉松ワカナ・一郎（ミスワカナ・玉松一郎）や新興快速舞隊（あきれたぼういず）と、こちらも当時人気のあった２組が吹き込んでいる。この漫才/漫芸ＳＰレコードは、複数演者の吹き込みによる６枚組レコード「名人會寄席の夕　第二輯」のなかの１枚である。

そして、寄贈ＳＰレコード 79 枚中 53 枚と最も多数を占めているのは浪曲のレコードである。落語や講談に比べて新しい演芸の浪曲は、祭文や説教節といったさまざまな芸を取り入れて発展し、やがて講談から取り入れたネタに節をつけて語るようになった。浪曲もまた、地方から都市へと移り住んだ人々の支持を集めて寄席や劇場へ進出し、やがてその人気を全国区のものとしていった。浪曲の人気は、レコードによる影響も大きい。ご寄贈いただいた浪曲レコードも、当時の浪曲人気を物語るかのように、その枚数だけではなく、吹き込んだ演者の数も多い。京山幸枝・京山小円・寿々木米若・二代目天中軒雲月・梅中軒鶯童・冨士月子・三代目吉田奈良丸、そして東京の広澤虎造と、大正から昭和に活躍したさまざまな浪曲師のレコードがある。

また、大正から戦前まではＳＰレコード全盛の時代でもある。海外で生まれ、明治時代に日本へ入ってきたＳＰレコードは、大正時代末にアコースティック録音から電気録音へと変わり、昭和になると、国内レーベルが続々と設立された。これらのレーベルからはそれぞれ、演芸のレコードが数多く発売されている。演芸のＳＰレコードが発売されることによって、寄席や劇場に行くことができなくても、演芸が楽しめるようになった。また反対に、演芸のレコードを聴いて、

実際の芸を見てみたいと寄席に足を運んだ人もいたことだろう。このような演芸の楽しみ方は、令和の現代にも通じるものがあると考える。現代では、ライブ会場で演者や歌手の実演を楽しみ、家や移動中には公演のライブ配信を見たり、パソコン・スマートフォンなどにダウンロードしたデータを視聴して楽しんでいる。こうして見てみると、時代によってジャンルや記録する媒体の違いはあっても、それを見て・聴いて楽しむこと自体に関しては、昔も今も同じで変わらないのではないだろうか。

近ごろは、かつての流行が「平成レトロ」「昭和レトロ」として再び脚光を浴びているという。年代を経たものの良さに注目が集まっているこの時期に、人々に親しまれ受け継がれてきた上方演芸のＳＰレコードがあったことを知り、そして聴いていただければ幸いである(当館の映像音声視聴ブースでは、当館所蔵のＳＰレコード(一部)の音源をお聴きいただけます)。

また、開館 25 周年を迎えた今もなお「当館で上方演芸の資料を役立ててほしい」と資料寄贈のお話をいただけることに、心より感謝申しあげます。

＜参考文献＞

前田勇『上方落語の歴史』、杉本書店、1966 年
正岡容『日本浪曲史』、南北社、1968 年
倉田喜弘『演芸資料選書・４ －演芸レコード販売目録－』、国立劇場、1990 年
三田純市『昭和上方笑芸史』、學藝書林、1993 年
倉田喜弘・難波隆之編『日本芸能人名事典』、三省堂、1995 年
大阪府立上方演芸資料館編『上方演芸大全』、創元社、2008 年
毛利眞人『ＳＰレコード入門 －基礎知識から活用まで』、スタイルノート、2022 年

収蔵資料の紹介（資料整理の現場から）

曽我廼家五郎劇『蔭日向』資料の紹介

島田　智子（上方演芸資料館司書）

令和元年度の年報において、曽我廼家五郎劇『蔭日向』の訂正脚本（昭和23(1948)年１月、名古屋御園座）を紹介した。これは、病によって声が出にくくなった五郎のために曽我廼家十吾が改訂したものである。今回はその『蔭日向』にまつわる当館所蔵資料を３点紹介する。

１．辻番付「曽我廼家五郎一派短期興行」〔資料コード 00601435〕

昭和二年九月十五日より廿六日まで十二日間限り　道頓堀中座

451×625mm（裏打ちのサイズは472×647mm）

五郎劇における『蔭日向』初上演のときの番付。貴重な資料でありながら、登録情報（当館の収蔵資料管理システムに入力されている資料名）に誤りがあり、前回の調査ではたどりつけなかったが、その後の資料整理の過程で発見することができた。

中央の「狂言五種に就ゐて」によると、５作品とも新作である。この文章だけではどういうストーリーなのか想像しづらいが、次のように紹介されている。

狂言五種に就ゐて

第一『紅薔薇』…は、実話！主人公は立派な実業家、内証話を種にして一幕書いたお笑ひ草、其御本人には内々に候。

第二『色花緒』…は、相惚れの望み叶ふた夫婦仲、固い赤縄の結び目をしつかり〆めた両花緒切れぬ様にと他所ながら、じつと見守る親心馬鹿な親よと笑われても当人一生懸命に候。

第三『御手車』…は、御高二十五万石、松平家の御世継ぎ若君安々御誕生、上を下へと喜びの中に生れた筋書きは、旧ゐ落語の落し種に候。

第四『蔭日向』…は、釣瓶落しの秋の夕草の葉末に一ト滴落す情の露の玉、それが参惨に砕かれて後に苦笑が残り候。

第五『喧嘩デー』…は、相思の中の夫婦ほど泣いたり、拗ねたり怒つたり気儘が過ぎて痴話喧嘩殴る引掻く其の後は何時の間にやら仲直り犬も喰わずに呆れ居り候

以　上

暑中休みを幸に支那朝鮮へと旅烏、拾ふた種で新作五種拠てどんな花が咲きますやら出来損ひは平に御用捨。

五郎劇作者

一　堺　漁　人

各　位

上段左側には『蔭日向』の絵があり、「氷」と書かれた屋台を背に腕組みをして立つ店主らしき男性と、彼に許しを請うか頼みごとをするかのようにひざまずく男女が描かれている。この構図は、翌昭和３(1928)年３月の新橋演舞場公演の際の絵本（大阪府立中之島図書館蔵）でも同様である。但し、公演時期の違いにより、絵本では「しる」の屋台である（時期によって屋台で扱う品が変わる点については、令和元年度年報の拙稿を参照されたい）。

下段の「登場人名」欄では、舞台設定と配役が確認できる。『蔭日向』のみ次に示す。

第四　蔭　日　向　一場

天王寺附近ガード下

一　冷し飴屋阿部作兵衛　五郎
一　辻車夫　甚七　時右衛門
一　按摩　宗蝶
一　会社員　一郎
一　工夫　一満
一　あんこ仲仕　蝶笑
一　出前持の男　二三郎
一　女かみゆい　蝶寿
一　使戻りの下女　富士丸
一　夕刊売　五鶴
一　兵卒　貞蝶
一　自転車に乗った男　蝶太郎
一　植木屋　藤助　五楽
一　田舎者　某　三郎
一　放浪者　熊本文吉　十五
一　作兵衛の嬶　お町　蝶六

「放浪者　熊本文吉」の「十五」が、のちの「十吾」である。ここで十吾の名前の変遷をたど

ると、子役の頃は大門亭大蝶一座で「文蝶」、明治 39(1906)年に曽我廼家十郎に弟子入りして「曽我廼家文福」、十郎の元を離れた後、大正５(1916)年に「茂林寺文福」を名乗る。十郎の没後、五郎が昭和２(1927)年４月に十郎の三回忌追善興行をおこなうにあたって五郎劇に加入、十郎の「十」と五郎の「五」で「曽我廼家十五」となった。そして、五郎劇を離れて「十吾」と改める。

なお、一般に、十吾が五郎劇を退団、改名したのは昭和２(1927)年とされているが、先述の昭和３(1928)年３月の新橋演舞場公演の絵本にも、同じく「放浪者　熊本文吉」に「十五」の名がある。よって、少なくとも昭和３年３月にはまだ五郎劇にいたと考えられる。

『蔭日向』が表題作となっている『曽我廼家五郎全集』第８巻（アルス、昭和６(1931)年刊）と照合すると、全集には配役は書かれていないが、舞台設定は同じ「天王寺附近ガード下」で、登場人物もほぼ一致している。

初演から 21 年後、五郎にとって最後の『蔭日向』となった昭和 23(1948)年の公演（１月は名古屋御園座、２月は大阪中座）では、声に問題を抱える五郎のために十吾が台本を改訂した（令和元年度年報で紹介した〝訂正脚本〟）。そのため登場人物も大幅に変わっており、単純に比較することはできないが、昭和 23 年２月中座公演の絵本（令和元年度年報 p40 で紹介）をもとに配役に限って見ると、双方に共通する演者は五郎、三郎、十吾（十五）の３人だけで、なかでも同じ人物「熊本文七」を演じているのは十吾のみである。

これらにより、十吾は五郎劇における『蔭日向』初演時から参加しており、主役に並び立つ重要な役を演じたことが確認できた。五郎の晩年に改訂も手掛けていることから、「もともと、蔭日向も親心子心も十吾の作である」という高須文七の解説（令和元年度年報 p35 で紹介）の信ぴょう性が高まるのではないだろうか。

２．道具帳「蔭日向」〔資料コード 00476218〕

彩色

大きさ 133×365㎜

右側にえんぴつ書きで「蔭日向」の文字と「かすしる」の屋台の絵

令和元年度年報の拙稿で触れたように、高須文七が遺した道具帳にも『蔭日向』が含まれてい

〔書込み部分拡大〕

る。道具帳は舞台美術において重要な図面で、舞台を正面から見たときの舞台装置が描かれており、芝居の舞台背景や大道具製作のもとになる。本稿の執筆にあたり文七のご遺族から貴重なお話をうかがえたのだが、文七は常々、「絵を描けるだけでは道具帳は描けない。芝居のわかる人、脚本の読める人、つまり、人間（役者）の出入りがわかる人でないとだめだ」と語っていたそうである。また、この屋台の絵のように、空いたスペースにいろいろと書込みをしていたとのことで、実際にこの資料より細かくたくさんの書込みがある道具帳も多い。

『蔭日向』は一場の芝居であるからか、現在、『蔭日向』と特定できる道具帳はこの１枚のみである。これだけで、どこのガード下なのか、いつ制作されたものかを特定することは難しい。しかし、右側に書き込まれた絵がかすじるの屋台であることから、冬季に上演する舞台のために描かれたものであることは間違いないだろう。

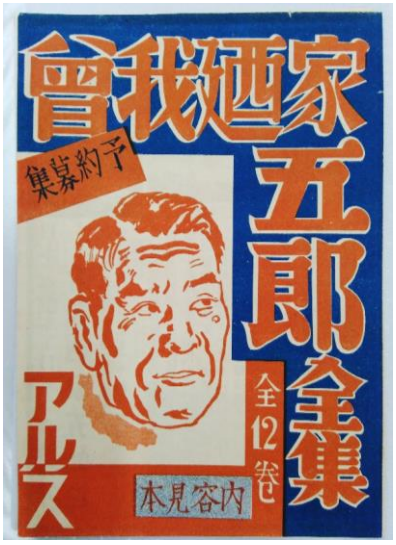
３．曽我廼家五郎全集　全 12 巻　内容見本　予約募集

〔資料コード 00571851〕

アルス　二つ折り２枚　申込書付き

わら半紙に赤と青の２色刷り　両面印刷　189×131mm

申込書は黒１色刷り（155×356mm）両面印刷　四つ折りで貼付



〔左：表紙、右：４、５ページ目〕

『曽我廼家五郎全集』は全 12 巻で、昭和５(1930)年７月から順次刊行された。『蔭日向』は第８巻に収録されており、１で紹介した辻番付第二の演目『色花緒』も第 10 巻の表題作になっている。

内容見本の本紙最終ページに、第一回配本の第１巻『恋を忘れた女』は「発売（どこの本屋にもあります）」、第二回配本の第２巻『涙』は「八月上旬発売」とあることから、第１巻が刊行された昭和５(1930)年７月に発行されたと考えられる。申込書は、片面は申込書と全集会費一覧表・

講座会費一覧表が、もう片面には監査票・払込票・払込通知票・受領票が印刷されている。全集は『ファブル昆虫記』全 11 巻や『白秋全集』全 18 巻など、講座は『機械工学大講座』全 18 巻や『建築大講座』全 16 巻、『美術大講座』全 10 巻など、演芸とは関わりの薄い分野の本である。

本紙３ページ目から７ページ目には、宗教家の田中智学をはじめ、東京市長（当時）の永田秀次郎、歌人の吉井勇、歌舞伎役者の市川猿之助（二代目・のちの初代猿翁）等、さまざまな業種の人物総勢 20 名からの推薦文が掲載されている。なお、全集第１巻の巻末にも 28 ページにわたって推薦人が名を連ねているが、こちらの方が内容見本よりも６名多い。また、推薦文も第１集の方が長いものがあり、内容見本には基本的には第１集の推薦文をそのまま載せるが、紙面の都合か、一部削ったり編集したりしたものを掲載する場合もあったようである。双方の推薦人を一覧にした表を右に示す。

『曽我廼家五郎全集』推薦人一覧

第１巻		掲載順	内容見本		第１巻での掲載順
肩書	名前		肩書	名前	
—	田中智学	1	—	田中智学	1
拓務次官 侯爵	小村欣一	2	拓務次官 侯爵	小村欣一	2
東京市社会局社会教育課長	池園哲太郎	3	劇評家	河竹繁俊	11
東京朝日新聞社々会部長	鈴木文史郎	4	松竹社長	大谷竹次郎	21
慶大教授	佐々木邦	5	東京朝日新聞社 社会部長	鈴木文史郎	4
—	吉井勇	6	歌人	吉井勇	6
東京市長	永田秀次郎	7	東京市長	永田秀次郎	7
松坂屋本店専務	桑原益太郎	8	貴族院議員	関直彦	25
帝国劇場専務	山本久三郎	9	俳優	市川猿之助	15
—	伊原青々園	10	警視総監	丸山鶴吉	24
—	河竹繁俊	11	レート本舗 主人	平尾賛平	18
新橋演舞場社長	川村徳太郎	12	松屋 専務取締役	内藤彦一	19
法政大学教授	陶山務	13	東京朝日新聞社顧問	杉村楚人冠	20
俳優	伊井蓉峯	14	法政大学 教授	陶山務	13
俳優	市川猿之助	15	帝劇 専務	山本久三郎	9
陸軍中将	長岡外史	16	慶大教授	佐々木邦	5
評劇家	福地信世	17	都新聞	伊原青々園	10
レート本舗主人	平尾賛平	18	陸軍中将	長岡外史	16
松屋専務	内藤彦一	19	東京市社会教育課長	池園哲太郎	3
東京朝日新聞社顧問	杉村楚人冠	20	—	川村徳太郎	12
松竹合名社々長	大谷竹次郎	21	計 20 名		
—	久保田金僊	22			
大阪駅長	大角鉞	23			
警視総監	丸山鶴吉	24			
貴族院議員	関直彦	25			
—	結城禮一郎	26			
計 26 名					

・「—」は肩書が書かれていないことを示す
・塗りつぶした人物は第１巻にのみ掲載

以上、台本に端を発し、番付、道具帳、全集の販促資料と、種別の異なる『蔭日向』の資料を見てきた。今後も関連資料が見付かれば紹介していきたい。

＜参考文献＞

＊新生松竹新喜劇文芸部・松竹関西演劇部編集、白井信彦監修『喜劇百年　曽我廼家劇から松竹新喜劇』松竹株式会社関西演劇部、2004 年
＊三田純市『上方喜劇　鶴家団十郎から藤山寛美まで』、白水社、1993 年
＊大槻茂『喜劇の帝王　渋谷天外伝』、小学館、1999 年
＊倉田喜弘・藤波隆之編集『日本芸能人名事典』三省堂、1995 年
＊山口廣一『大阪の芸と人』、布井書房、1967 年
＊東川松治「戦後上方喜劇私史」、『上方芸能』所収

上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等

【経　緯】

○　平成元年３月　故砂川捨丸氏の遺族から、氏が愛用された貴重な鼓を大阪府に寄贈

○　平成２年１月　貴重な資料の散逸を防ぎ、大阪が誇る文化遺産である「上方演芸の歴史」とともに後世に残していく必要があるとして、「上方演芸保存振興検討委員会」（会長：井上　宏　関西大学教授）を設置

○　平成４年３月　同委員会において「上方演芸保存振興事業基本構想」を取りまとめ、資料館の設置を提言

○　平成５年１２月　大阪府において、資料館の立地場所を大阪市中央区難波千日前に決定

○　平成６年７月　基本構想を受け、大阪府において資料館に関する基本計画を策定

○　平成８年３月　大阪府立上方演芸資料館条例を公布

○　同　　年　８月　3,000 を上回る一般公募の中から資料館の愛称が「ワッハ上方」に決定

○　同　　年　11 月　展示室、演芸ホール、演芸サロン・資料室、レッスンルームや収蔵庫等から構成される有料施設として、大阪府立上方演芸資料館がオープン

○　平成 20 年２月　大阪府が「財政非常事態」を宣言し、全ての事業、出資法人及び公の施設をゼロベースで見直すこととし、資料館もその対象となる

○　平成 21 年 12 月　「大阪府戦略本部会議」において、「資料館が今後も果たすべき役割は、資料の収集・保存、資料の活用（展示・ライブラリー）、レファレンスサービスであり、「公演」「育成」は民に委ねる」との方針を決定

○　平成 22 年 12 月　演芸ホールを廃止

○　平成 25 年１月　「大阪府戦略本部会議」において、「当面は、現地において、常設展示を縮小し、より効率的な運営を行い、無料での利用に供するとともに、巡回展示や大学との連携等による研究機能の充実など新たな展開を図る」との方針を決定

○　同　　年　４月　展示室・レッスンルームを廃止するとともに、入館を無料とする

○　平成 26 年７月　「大阪府市文化振興会議アーツカウンシル部会」が、資料館の今後の方向性について、「大阪独自の文化である上方演芸を後世に伝えていくことは大阪府の文化行政が担うべき役割の一つであり、現時点では、資料館がその仕事を果たすことが望ましい」と提言

○　平成 27 年４月　提言を踏まえ、資料の整理・活用を継続的かつ計画的に取り組めるよう、指定管理者による運営を改め、大阪府の直営による運営を開始

○　平成 30 年７月　収蔵庫を大阪府咲洲庁舎に移転

○　　同　年 11 月　多くの府民や観光客等が上方演芸に触れ、楽しみながら、その魅力を知ることができる「体験型」の事業を中心に企画・運営を実施するという方針に基づき、リニューアル工事に着手

○　平成 31 年４月　リニューアルオープン

【機能の推移】

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">開館～</td><td colspan="2">平成 23 年 4 月～
（縮小）</td><td colspan="2">平成 25 年 4 月～
（縮小・無料化）</td><td colspan="2">平成 31 年 4 月～
（全面リニューアル）</td></tr>
<tr><td>場所</td><td>区分</td><td>面積（㎡）</td><td>区分</td><td>面積（㎡）</td><td>区分</td><td>面積（㎡）</td><td>区分</td><td>面積（㎡）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">4
階</td><td colspan="2">展示室</td><td>1,170.991</td><td rowspan="3">存置</td><td rowspan="3">同　左</td><td colspan="4" rowspan="3">廃　止
※1</td></tr>
<tr><td>演芸ﾗｲﾌﾞﾗﾘｰ</td><td>150.0
（15 ブース）</td></tr>
<tr><td>小演芸場
［上方亭］
（有料）</td><td>98.44
（74 席）</td></tr>
<tr><td>5
階</td><td colspan="2">演芸ホール
（有料）</td><td>1,484.34</td><td colspan="6">廃　止
※2</td></tr>
<tr><td>6
階</td><td colspan="2">事務室</td><td>326.705</td><td>存置</td><td>同左</td><td colspan="4">廃　止</td></tr>
<tr><td rowspan="3">7
階</td><td colspan="2">ﾚｯｽﾝﾙｰﾑ
（有料）</td><td>99.85
（60 席）</td><td rowspan="3">存置</td><td rowspan="3">同左</td><td>（改修）
※3</td><td>同左</td><td>（改修）
常設展示エリア・
視聴ブース
（5 ブース）</td><td>99.500</td></tr>
<tr><td colspan="2">収蔵庫</td><td>260.00</td><td>存置</td><td>同左</td><td>（改修）
企画展示エリア・
演芸ステージ・
体験エリア・
エンディング通路
（事務室含む）</td><td>305.750</td></tr>
<tr><td colspan="2">共用部分</td><td>250.093</td><td>存置</td><td>同左</td><td>（改修）</td><td>204.693</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">合　　計</td><td>3,591.979</td><td></td><td>2,107.639</td><td></td><td>609.943</td><td></td><td>609.943</td></tr>
</table>

※1　ライブラリーは、9 ブースに縮小のうえ 7 階へ移設

※2　平成 22 年 12 月に演芸ホールを廃止

※3　レッスンルーム（有料）を廃止のうえ、ライブラリー(9 ブース)及び事務室に改修

【管理運営】

期　　間	管　理　運　営	備　　考
開　館　　～平成 14 年　３月	(財)大阪府文化振興財団	管理運営委託
平成 14 年４月～平成 18 年　３月	大 阪 府	直営
平成 18 年４月～平成 22 年 12 月	（ＮＰＯ）ニューウエーブ日東大阪	指定管理
平成 23 年１月～平成 23 年　３月	大 阪 府	直営（休館）
平成 23 年４月～平成 27 年　３月	吉本興業グループ	指定管理
平成 27 年４月～	大 阪 府	直営

【歴代館長】

期　　間	歴　代　館　長　名
平成　８年 11 月　～	狛林　利男
平成 11 年　４月～	井上　　宏
平成 14 年　４月～	有川　　寛
平成 18 年　４月～	伊東　雄三
平成 23 年　１月～	★大阪府直営＜休館＞
平成 23 年　４月～	河井　　泉
平成 25 年　４月～	井上　　明
平成 26 年　４月～	田中　宏幸
平成 27 年　４月～	★大阪府直営

大阪府立上方演芸資料館　令和３年度年報

編集・発行　大阪府立上方演芸資料館
〒542-0075　大阪市中央区難波千日前 12-7
ＹＥＳ・ＮＡＭＢＡビル７階
TEL：06-6631-0884
令和４年 11 月発行